

326
211

出 び 思

ろ た い け

597

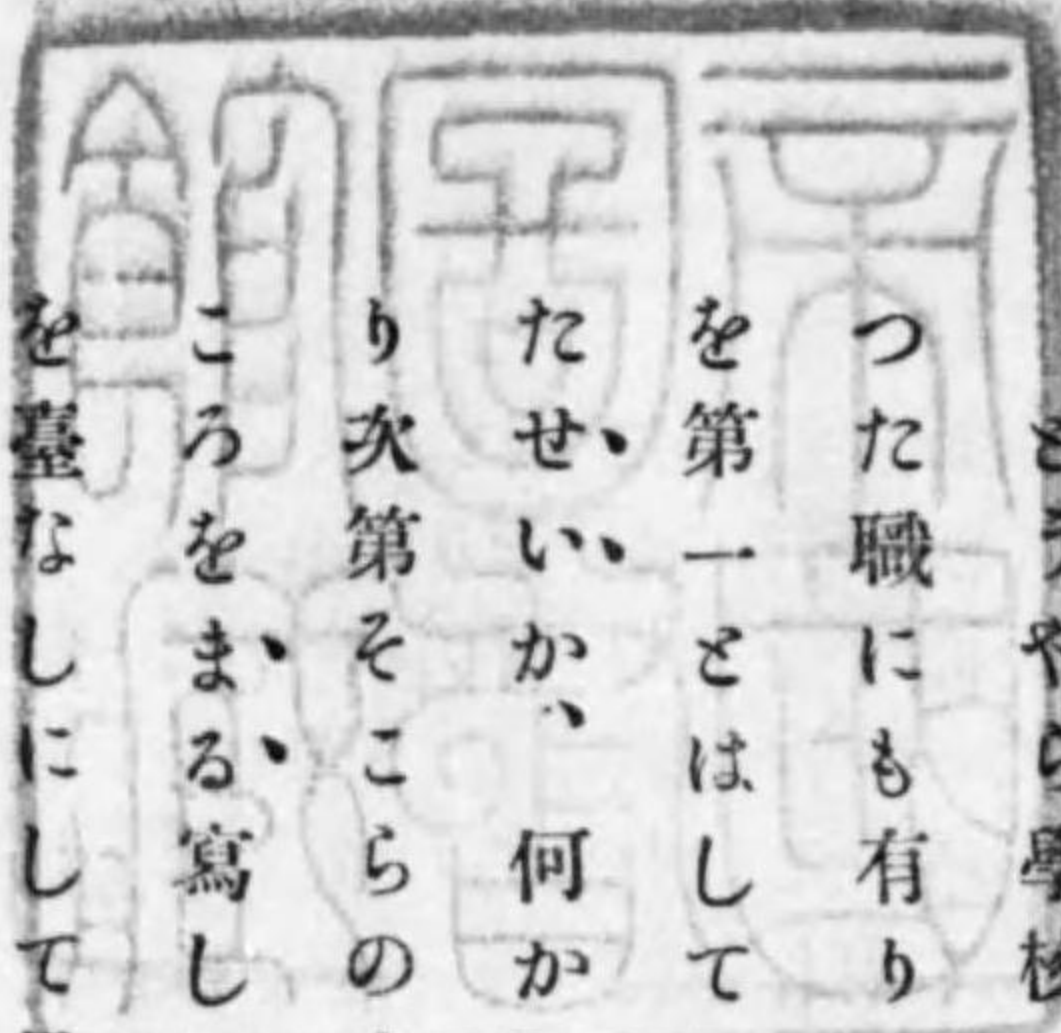
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 0m 1 2 3 4 5

始



はしがき

どうやら學校は終つたものゝ色々の事情で今までこれと云つて定
つた職にも有りつかぬ僕としては、まあ生氣でもして身體を作る事
を第一とはしてゐるが、どうも長い間ノートや字引と首引きしてゐ
たせい、何かしら読んで見たり書いて見たりしたい。そこで手當
り次第そこの本を読みちらして、その中の僕の心にピンと來たど
ころをまる寫しにして見たり、自分の意見を添加して却つて文全體
を臺なしにして見たり、或は自己の思出をたどりく拙なき筆もて
自分ながら嫌になる様な作文をして見たりしてゐたら何時か原稿ら
しいものが三十近くも溜つてゐたので其れらを並べて此度此小本に
して見たまでだ。



思つて居る事をさて筆で表現しようとするとなかく六ヶしいもので、とくに作文では何時も乙か丙しかもらへなかつた僕には最も苦手で不向きなことで、それが何か書いて見ようといふ様な殊勝な氣になつたのだからお日様が西から出やしないかと心配してゐる。けれど此本は廣く人に見せるために作つたのでもなければ、自分の思想や理想をこれに依つて他へ吐露しやうとするのでもない。只つれづれなるまゝにこんな悪戯をして見たまでである。

だから若し此本を不幸にして讀んだ人があつたら書いてゐる事を本氣に受けてもらつては困る。一切書いてゐる事に責任を持つわけに行かぬ。全く書いてゐる事は折々の氣まぐれな戯言ばかりだから『片言以てその人を知るべし』など言つてくれては迷惑千萬である。只自分の下手な作文の練習帳に過ぎぬ事を御承知おき願ひたい。

昭和四年十月

慶太郎

目次

小論集

我が國民性の史的考察	一
日本人の調和性に就て	四
我が國の家族制度	七
道徳的行爲の發生的研究	二一
道徳的地位とは	二五
生物發生の神秘	二九
動物體と社會主義	三三
危険思想の社會科學的考察	三八
宗教偶感	三三

地獄極樂の有無を論ず……………三六

貝島と生氣……………四三

生命と生氣……………五二

鳥のやうに……………五四

温故知新……………五六

花より團子……………六二

相互的温情主義……………六六

新勞資協調(一)……………六八

同(二)……………七三

思ひ出草

恩師のことども……………七九

箱崎での思ひ出……………九〇

初飛行の思ひ出……………一〇八

思出の山口……………一一八

高商生活……………一二五

(附) 第一回山口カタバミ會の思ひ出
 僕の月旦

學生時代の思ひ出さまざま……………一四八

清水港での印象……………一八一

亡き友を悼みて……………一八七

一言集

泰西寸鐵語集……………二二四

隨筆その他……………二七

瓢箪のこども……………二七

初夏の山口……………三〇

星夜……………三三

ある頃……………三六

別離の歌……………三八

湖畔雜詠……………四〇

小説……………四五

ダイナモ―大明神

彼

赤部屋

英語童謠……………一〇〇

“Higurashi”……………一〇六

“Kenbi-Kyo ka no Shosekai”……………一〇九

終りにのぞみて……………一〇九

思ひ出

小論集

我國民性の史的考察

元來一國の國民性(Nationality)は其國の歴史を左右し、又其國の歴史に徴して一國の國民性は窺ひ得らるゝものである。

日本史を繙く者の誰人もが痛切に感ずる處のものは我國民性が幾多の個々の史實を通じて如實に表現せられて居る事である。私は其顯著なるものを極抽象的に左の四つに分つて考察する事にする。

第一は國家主義的精神が豊富に現れてゐる事である。固より皇室中心を基礎として出來、君臣間は形式的にこそ治者被治者であるが

其本質は父子の關係で、我國の總べての道德は源を是に發して居ると斷定しても過言ではない。換言すれば個々の分子の集團たる國家と皇室とは渾然として一體をなし君國一體である處に我日本の力味はあるのである。實に國家の爲、君の爲、民族の爲に喜んで其一身を犠牲にし、皇室を中心として、民族的家族的發展をなせる事は確かに我國史の異彩であると同時に、我民族の優秀性を明白に物語るものである。

第二は同化性の強大なる事である。之を歴史的に見れば、外來思想の壓迫の危期に幾度となく直面して尙國民道德を遵守して彼を同化吸収しよく自己の血となし、肉となし、所謂日本化し來つたのである。即ち具體的に云へば第一が支那の儒教若くは支那的色彩の濃厚なる思想で、第二が佛教を中心とした印度及支那の思想、第三が

基督教を基礎とした歐米思想等で之等の思想的侵略をよく打つて一丸となし、一言にして言へば東西兩思想の *Melting point* として又我帝國の偉大さを痛感するものである。

第三が現實主義的精神の多分に存在する事である。併し之は長所たると同時に一面には我短所であつて古來より秀逸せる科學者、思想家等に乏しい怨はあるが、元來我國は上古より現世の國家を愛して徒らに空想に走らず、一時代の國家の方針なり社會生活なりの改良發達に全力を集中し根本よりの所謂改革運動を主眼として居ない。故に現今の反資本主義的運動を危険視するのにも一に我國に現實主義的傾向の著しい爲めである。

最後に數へんとすのものは平和主義をモットーとして居る事である。外國人士の中には往々にして我國を好戰國と誤解してゐる者が

少くないが、實は之に反し根本精神は多く古代より武力に依らず平和手段を執つたものである。彼の正義の爲めの即ち東洋平和の爲めの外國との三度の戦争も結局平和主義的精神の然らしめし處と謂はねばならぬ。

要するに我國民性を概言するに皇室を中心とする家族制度を重んじ心的に同化性強大にして快活にして現實生活を樂しみ尙武の氣象の背後に優美なる平和的精神の在する事等を抽出し得るのである。

日本人の調和に就て

東洋思想の根本基調は、どこまでも統一的、綜合的、歸納的で、有らゆる事象を全體的に考究する所謂全體觀的立場にあり、其れに反して、西洋の思想は、凡ての事體を分析に分析を重ねて、其極微に

至らねばやまない所謂個體觀を以て終始しやうとする。此全體觀性と、個體觀性との相違が、東洋をして唯心的に、西洋をして唯物的に偏せしめたものと考察してもよい。而して、現代の歐米は、あまりに唯物的であり、科學萬能であり、さりとして、東洋思想の根源たる印度及び支那哲學の基調たる唯必至上の思想も、あまりに事物を單純化し過ぎて、粗略に取扱ふ懸念があつて、何だか、物足らなく感ずる。茲に於て翻つて我が國を見るに、正に地理的所在こそ東洋しかも極東の微々たる國に過ぎないが、それは尙獨自の立場にある事を看過し得ない。元來我が國民の性情は、よく模倣性が強大であるど内外共に思惟された。即ち自己に求めるより、他より吸収しやうとする傾向が強かつた。しかし唯模倣にのみ汲々として日も之足らざる有様で、自己的意識を全然没却したのが、過去の又現在の日

本であらうか。否々決して我が國の模倣性たるや、唯無意味な皮相的模倣とは考へられない。何となれば、我が國民性中の一大特長たる調和性乃至は、同化性は、此等海を越へて來りし、幾多の思想や文化をよく調和し、同化吸収し、自己の血となし肉となして、全く日本化し去つた個々の史實に徴しても如何に我が國が、圓融自在なる境地を尙んで、混然融合した一大思想の建設を目標としてゐるかを認識し得る。詳言すれば儒者の教理も、佛陀の教化も、我が國に移植されて、却つて其の完全性を發揚せられ、我が國體と結び付いた時始めて、眞の東洋的否日本の一大思想が樹立されたわけである。そして現今は、東西の文化は互に影響し、互に融和しようとしてゐる時に當つて、就中我が國が、兩者の混和を可能ならしむるに申し分ない地位にある事は、吾人の信じて疑はない處である。即ち、歐

米の文化の華と、東洋の思想の華とを打つて一丸となした所謂日本的中正的思想の創設こそ眞に我等昭和の青年の目標であらねばならぬ。

我が國の家族制度

我が國の家族制度は我が國固有の社會制度であつて、社會構成の單位を個人とせず個々の家を以てする制度で、これは家に立却して謂へばその世襲連續の必要より家の永續性を意味し、宗教的には祭祀の團體となり、經濟的見地からは共同經濟團體となり、或は各員の唯一の慰安所休息所ともなり、家庭は人間生活の總べてではないが、家を以て人間生活の極所と認むるに於ては各自の理想は異ることも孰れにしても一致し居るものである。而して個人的に見るならば、其の始め家庭の一員として生れたならば、終りまで家族の一員で生

八
涯の主義實行悉く家族の一員たる事を念頭に置いて行爲行動し、彼は祖先崇拜、兩親長上に對する尊敬と服従とを教へられ、禮節を磨き、生活資具の取得にのみ忙殺する事なく、其結果は道德的美趣的典型有するに至る。されば我が國民の總べての道德はこの暖き家庭に生るゝ事となつたと言つても過言ではない。而して元來我が國の家族制度なるものは、大和民族の本幹より出でたもので帝國の國體も至緊至密の關係を有して居る事言を俟たぬ處である。何となれば我が國體の第一次的特色たる君臣一體の情的結合を生ずるに至つたのも一に此家族制度の然らしむる處で君と臣との關係は全く家族的關係で所謂の義は君臣で、情は父子の關係で畏れ多くも 大正天皇御即位の勅語に『爾臣民世々相繼キ忠實公ニ奉ス、義ハ即チ君臣ニシテ情ハ猶ホ父子ノ如ク以テ萬邦無比ノ國體ヲ成セリ』と宣し給ひ

しも明に君臣一體の義に外ならざるものと拜察せらるゝのである。而もそれは理論上から割り出されたものではなく、事實上即ち詳言すれば、神代の昔より君は臣を見る事赤子の如く、臣は君を見る事嚴父の如く、其間に父子の情を以て結合せられ君臣一體約言すれば、日本といふ國家それ自身がすでに一大家庭とも稱すべく、茲に我が國の異彩は燦として輝いてゐるのである。

以上見た如く我が國の家庭は國家的意義乃至は關係が濃厚であるから従つて歐米の家庭に比し頗る複雑面倒なるに拘はらず、其の内に和氣霽々の春風が吹いて居る事は確かに彼歐米人をして東方諸國の家庭生活を驚異の目を睜つて眺めるに至らしめた理由ではなからうか。彼の個人主義的色彩の最顯著な米國人でさへ『世界平和は家庭から』と叫んで居るではないか。

實に我が國民の生活なるものは家庭を外にしては考へられないもので、家庭を離れて生活を説くのは、空氣を外にして風を説く様なものである、而して此家庭の内軸は我が國に於ては横即ち夫婦の關係より縦即ち親子長幼の關係の方が重要さを有し、此縦と横との軸を組み合せ十字形となし其れに圓を描いたものが我が國の家庭であると思ふ事が出来る。その個々の家庭の健全であるか否かは直ちに其集團である國家社會の健全不健全を意味するもので實に重大なる問題と謂はねばならぬ。

然るに現今に於ては、此永い麗しい歴史を有する我が家族制度は、社會の進歩、社會的條件の變遷或は思想上經濟上の組織變動等を原因として其動搖を招致して居る事實は吾人の否定し得ない處である。然らば如何にして動搖し初めた家族制度を維持存続せしむべきか。

曰く、其缺點を除去して長所を充分に發揮せしめるにありと。如何なる制度にも長あれば必づその反面に短あるは否定し得ない事實であらうが、短あればとて其長までも捨て去るといふ事は、合理的なものとは謂へない。長は長としてどこまでも伸長向上せしめ、短は他の制度の長を以て置き換へる事肝要である。さてその具體策としては、或は家庭構成員各自が他人の人格を尊重し、家族の自由を尊び、父母其他長上への孝養を怠らざると同時に、上は下を心からなる同情を以て愛撫する時即ち各員が精神的に、生き精神的に結合され、こそ我が家族制度は更に光輝を放ちそれはやがて世界の眞の模範的社會制度となる事は斷言して憚らぬ處である。

道徳的行爲の發生的研究

Dewey は其著 *Ethics* に、倫理學の一般科學性と其特種問題の研究に當つて、その發生的研究こそ、眞に之を理解するに裨益する處が尠少でないと言つて、發生的考査の必要を論じてゐる。以下少しく其説く處を述べて見る。道德も一般的人生生活の過程を論ずるに當つて、其過程の歴史を辿り以て現状を明にすると同じく、先づ、此場合も以前に於ける幾多の階段を考察する事が肝要である。その理由は、第一に吾人は、其研究を、一層單純なる材料(a simpler material)より始むるを得る。現時の道德的生活は極めて複雑にして、吾人の所謂善とする所のものを決定せんとするにも諸種の方面に於ける利害を顧慮せねばならず先づ、一層單純なる問題より考察を始める事は望まじき事である。

第二に、現在の道德的生活中には、『原形物』と、『殘存物』とを包有するを以て、道德的判斷に於ける幾多の牴觸は、吾人が往時に於ける道德の光明の助けを俟つに非ざれば、容易に現代の道德的生活を理解し得ないであらう。次に

第三には、We may get a more objective material for study とて、吾人の道德生活なるものは、吾人自身と極めて密接なる關係を有するを以て、吾人が之を公平に觀察するには、頗る艱難な點がある。然るに吾人の生活より離れた客觀的材料を得らるる發生的研究に於ては、此艱難が緩和される。

最後に此研究方法が、道德の動的進歩的特性を示す點に特に力説するにある。單に現在の道德のみの研究をする時は、尙ほ製作中の未成品に非ずして、却つて一ケの不變化物固定物なりとの印象を得易く道德の成長性を看過する過失に陥る。故に吾人は、現在の道

徳意識と其判断とを分析するに先ちて、初期の階段より、即ちより單純なるものより其概略を述べんとする。と言つて、發生研究の如何に重要性を有するかを力説してゐる。

しかし、獨り此研究方法は、道德、倫理上の研査に與つて力なるのみならず。そは有らゆる事象の考究に當つて、最も力強い命題を吾人に認識せしめるであらう。何となれば現今の複雑化した自然現象乃至は、社會現象と言つた様なものを現在に立脚して複雑中に複雑を求めても到底満足な歸結は求め得られない。そこには、あまりにも他の現象との關係、交渉が多くて、其れ等のものから切り離して一つの現象を研究する事は、なか／＼至難事でやはり、その發生的即ち歴史に遡つた研究こそ、それはやがて理在を闡明にする所謂である。

宜なる哉、人間とは何ぞやの問題を、アメンバーに遡つた研究に轉換してこそ問題の要諦も把握し得るものである。

道德的地位とは

所謂我々の正邪の決定を受くべき主題、即ち道德的地位なるものは、有意的活動を含む(The moral situation involves voluntary activity)事は何人も承認するであらう。而して有意的活動の主要なる特性は、

- 一、行爲者が其の動作を知つてゐる事
 - 二、第二に行爲者は其の行ふことに就て或る願望と欲望とを有し之を採擇しなければならぬ事
 - 三、その動作は品性の表現たる事
- の三條件を具備するものである。しかし、有意的のもの凡てが必

すしも運德的判断を受けるとは限らない。

一六

それは、voluntary と Not voluntary との中間の何處かに存在してゐるもので、明に有意的動作でありながら道德的判断を受けないものがあると同時に、又他方有意的でないものであつても善惡正邪の語を以て呼ばれるものが少くない。

詳言すれば、善或は正と判断されるもの必ずしも道德的ではない事は、例へば、悪しき風、善き機械、正しくない時計等といふ時には、我々は單に價値及び價値に對する寄與といふ概念を適用して判断するので、無生物にあつては、其の物自身が意欲し又は企圖するものではないから道德的對象となる事はできない。

次に、動物の活動に於ける善惡は、例へば犬が家を守る結果に就て觀念を有し、而して此の觀念に忠實なるが爲め又は其の爲す處に満足を感じるが爲めに、自ら其行動を支配するでない以上は、我々は、之を道德的善惡を以て呼ぶ事は不可能である。

斯くの如く動物の動作は、價値の觀念に依つて喚起されるものでないから我々は之に道德的意義を認めないが、然らば價値觀念に依て喚起される動作には凡て道德的意義があるかと云ふと決してさうでない。我々が到達しやうとする結果に就て價値觀念を有し且つ此の觀念に依て喚起される動作でありながら、而かも道德の領域に屬すると認め得ないものがある。

『人生の凡てを占めてゐる』と云はれる行爲なるものは、之がために凡て道德的意義を有するものであるとの結論は生じない譯である。故に人間の行爲中にも動物の動作と何等異なる處なき所謂中性的のものでして道德上何等の交渉を有たないものがある事は、吾人の日常

一七

生活中何等倫理的意識を有しないものの多々ある事實を見れば闡明される。

併しながら我々が企圖する或る目的の價值が眞に他の目的の價值と相容れない事を感じる場合、換言すれば、異つた種類の性向及び動因に訴へて相争ふことを感じる場合には、茲に一の道德的地位を有するに至るものである。

以上の見解より道德的行動の定義をすれば次の如くなる。即ち道德的行動は、價值の觀念に依つて喚起指導されたる活動であつて、且つ此の場合に關係ある價值は、二個以上の互に兩立し得ないものであるから外面的動作に先つて之を熟慮選擇しなければならぬ。

故に道德的行動は、價值の觀念又は結果の願はしき性質に依つて喚起される活動で、此點は明にポンプや動物の行動と區別され

る。

次に道德的經驗は數個の目的が互に矛盾し、相容れないが爲め其の中の一を選択し他を棄却してなされる行爲であらねばならぬ。従つて價值觀念に依つて喚起される行爲でも其の選擇された價值の眞價を制定する必要のない場合は道德的經驗から區別されなければならぬ。即ち與へられた目的の眞の價值を考察する必要が生ずるのには、互に相容れない目的が併存する爲めであり、而して斯かる考察こそ經驗をして道德の圏内に入らしむるものである。(Dewey's Ethics による)。

生物發生の神秘

個體の發生は、即ち發育は、其種族進化過程の短縮された總括で、

あると申します。詳言すれば吾々人間も初めは、一ヶの微少なる卵から發生して、僅か胎内十ヶ月間の發育に於て、最下等の生物から最高等のそれに至る約六、七千万年の長年月に亘つて進化した生物進化の経路の縮圖を見せてその進化の頂點である人間の赤子として生れ出でるものであります。しかし赤子の時には、まだくその進化の度に於て成人との間には多小の開きの存在する事は、赤子の動作を考察すれば直ちに闡明になります。

斯く、單細胞生物から多細胞のそれへ、次に魚類の如きものに進化し、次第に其複雑性を増加して産兒としての形態を備ふるに至るまでの進化現象は、實に自然の妙と申さねばなりません。そして此事實は明に生物進化の道程を物語るもので此範圍に於てはダーウインの進化論の論旨の正確に適用を許すものと思考致します。しか

し、茲に問題視されるのは、然らばその單細胞動物は如何にして發生したかといふ問題です。此考究に先つて必然的に考へねばならぬのは、生物と無生物との交渉です。學者は申します。

生物體と無生物體の區別の主要點は前者が生命を有し従つて生活現象を呈し個體構成の主成分が原形質である處にあると。そして此異つた兩者間の關係に就ては、古來幾多の議論が學者中にもあつて種々な學説もありますが、普通の見解としては、無生物に進化の加つたものが生物だと申します。そして科學的の立場からは無生物から生物の生ずる有様は、例へば、彼の酸素と水素とが水を生ずる様に、或事情の下に化學作用を起すのと同じで、地球の冷却した時に、水が生じたと同一に、無生物から生物が生じたのであると言ふのです。學説はそうなるかも知れませんが、私共の智識では、生命なき

無生物體より、生命従つて生活現象を有する生物體が直ちに化學變化の様な單純さで生れたとは、生命でふ問題が明示されるまでは、即座に認識致しかねる點があります。

何となれば、學者、特に自然科學者の知り得た生命の最古の歴史は、始生代の地層中に求めてゐる様ですが、生物發生の地球上に於ける年代は、吾人の智力上の推理問題としては、あまりに古い事實で、それに自然科學者の知り得た所謂生命の記録なるものが餘りに漠然としてゐて、生命の何たるや生物發生の發端の解決は、到底自然科學者のみのメスを以てしては證明し得られない問題ではありまじまいか、それは、哲學宗教の雰圍氣に入つてのみ始めて闡明にされるものだと思ひます。

動物體と社會主義

石川千代松先生の『人間不滅』中に動物體と社會主義といふ一文があるが動物學上から見た社會主義への批判が非常に面白かつたから次に其の要旨を簡單に述べる事にする。

『單細胞動物は一個の細胞で生活の仕事もすれば又生殖の仕事もするものであるから、其體に分業といふ様な事は少しも見へない。しかし之とても分業の萌芽は出來てゐる事は明かで彼の原形質内に既に分化が起つてゐる事實が證明してゐる。しかし其の分化は未だ甚だ弱いものである事は論を俟たない。』

それが、ボルボックスの如き單細胞動物の群棲になると、一つは生活の仕事許りをなし、他のものは生殖の仕事のみをなす所謂生活と

生殖との分業の初期が見出される。

それが、多数の細胞から出来てゐる個體たる生物になると複雑な分業が生ずる事になる。

親子もなければ、生死もない。單細胞から體内に分業が生じた結果たる死の現象を有する多細胞生物は明に生物の進化と見るべきで、極端な社會主義は、生物界に見る總べての現象に反對してゐる。

第一吾人の社會生活に於て、社會の人々が同一の境遇にあるといふ事は、恰度バンドリナのような群樓體と同様なもので、バンドリナでは其の十六の細胞が皆同一な仕事をして同一な権利を持つてゐるものである。

しかるに吾々人類社會に階級の出来た事は即ち分業であつて、其れが爲め社會も進歩する譯である。故に社會内に種々な階級のある事は、社會進化上必要な事である。夫れに又此社會内に主部が出来て、社會全體の事務を總括して行く事が最も必要であるのは、總て高等な動物に腦脊髓が能く發達してゐるのと同様である。

吾人又は高等動物で、胃だの肺臓だの肝臓だの、諸器管が、腦の仕事を見て不平を起し、少しも働かなくなつたならば、個體は死滅するより外ない。之と同様人間社會の各階級のものが主權者に對して不平を起し、自分も主權者と同一の事をなさんとするど、其社會は破滅する。そして社會に統一といふものが出来てこそ社會の強固さを増大するもので、商人は商賣に、お役人は公務に、教師は子弟の教育に、學者は、人類の幸福増進のために各々其仕事に忠實であつてこそそれ等の集團たる社會機能も圓滑に活動し行くもので、社會を成してゐる個人又は團體の動作は、何れも皆社會の存在を目的

として、相互共同的に行動して行く事が肝要である』といふのである。

右の如く單細胞生物ならいざ知らず多細胞動物中でも一番高等だと云つてゐる吾々人類は、何が故に高等なりやと考ふる時、以上見た如く分業の最も發達せる組織體なる事を知るであらう。さすれば吾々人類にとつて分業程有難い制度はない筈である。然るに其の適才適所的分業即ち差別制度を平等にしてしまふといふ考へは、せつかく茲まで發達した人類を吾々人類社會を單細胞のそれへ、原始時代のそれへと引き戻すといふのだからたまらない。

考へても解るではないか、生れ落ちた時から寸分違はぬ人間が一人でも自分の他に此世界の何處にゐるか。

肉體的に精神的に所謂十人十色なるが現實の姿である。故に甲に

は農夫が適しようし、乙には、商賣人が適當だらうし、丙には、大臣大將になり得る能力があるし、丁には能力こそなければ筋肉労働者として生計を營む事が能ると云つた具合に、それぞれ自己の職分を労働者は労働者として、資本家は資本家として、政治家は政治家、教育家は教育家として忠實に行使する事に依つて知らず識らず社會の進展は行はれるものである。

それを、平等たるべしとて皆が皆労働者でも困らうし、皆が皆資本家であつても社會は行き詰るし、皆が皆大臣大將であつては尙更動きがとれない。そして今日平等化しても明日は、各人に差別あり、能力、體力の強弱、熱心努力の如何に依つて早くも不平等たるをまぬがれない。それを平等化せんとするには、人間を人造にでもして一定の鑄型にでも入れて作らねば思ふ様に社會に絶對の平等を望む

事は不可能事である。

そう人間として萬能的の人はないから先づ自分の長を伸展させて自分の短は他人の長を以て補つてもらひつゝ、即ち社會各人の相互的協力動作に依つて人類社會は益々進化發展せねばならぬ。

危険思想の社會科學的考察

吾人の所謂科學とは、精密なる觀察、確實なる思索によりて得られたる學的智識が、一定の秩序のもとに統一せられたる一體系を稱するものである。而して科學は其科學的智識の異なるに従ひて、説明的科學と、規範的科學に自ら區分される。説明的科學の専ら事象の記述的研究より得たる智識によりて樹立されるに反し、規範的科學は専ら、或現象の價値を批判しつゝ、一定の準理準則の發見をなすと

同時に、それに基く理想の實現を終局の目的とするもので、技術的經驗とそこに密接なる交渉を齎するものである。

然らば、社會科學てふ問題は、如何なる科學の範疇に屬するものなるか。吾人は先づ、茲に於て社會科學なるものゝ研究内容を見るに、それは明に純理的部門と實地的部門の二ヶの研究目的を包含する事を知る。詳言すれば、社會現象の記述的説明によりて、社會法則を發見し更にその現象の倫理的價値の批判を遂行し、進んで、實地への進出、即ち理想追及の手段方法へと研究を伸展し行くものである。而して、是が自然科學と異なる所以は、自然科學が記述、と技術の二部門より成立するに加ふるに、社會科學に於ては、規範部門が其構成要素中最も重要な地位を占むる事之である。

前者にありては、其理論たるや人力を以て如何ともなし得ざる絶

體不變的自然現象を基底としての公理的法則の説明なる故萬人に普遍妥當性を有するものであつて、そこには何等倫理的、人道的分子が介在してゐぬから、その内容の人爲的吟味を必要としない。蓋し、その純理の應用たる技術部門に至りては社會科學と何等異なる所なく、人生への影響著しきを以て、慎重なる考慮の肝要なる事は論を俟たない。然るに社會科學に於ては、その現象たるや明に人爲的所産従つて前者に見る始き絶對性、普遍妥當性を缺ぎ、倫理的吟味を必要とする現象により發見した所謂社會法則なるものは、必然的に規範部門の成立を可能且つ必要たらしめるものである。

然して、最後の技術部門に至つては、自然科學のその應用者の常に留意せねばならない、即ち人生への影響如何を念頭に置いての應用、實行でなければならぬ。然るに、現今の社會科學研究の學徒に

は、往々社會科學の原理原則をも自然科學のそれと同一視し、何等それが正確さ、絶對さを吟味する事なく直ちにそれに動かすべからざる公理的性質を附與して、その理想(?)に何等現實に即する事なく唯物的一元的に社會を思惟して、幕地に究進し、或は、激越なる社會革命を呼び根本的破壊を之れこととして、現實への立脚を看過し、建設的態度を忘却した輕擧を敢てする者あるは、之全く社會科學の根本概念の皮相的理解に基く誤れる行動と言はねばならない。故に多數の社會現象より抽出したる一貫的法則の倫理的乃至は、文化的價値の批判を正確に施して、そこで始めて將來への理想を樹立して、之が實現の手段方法しかも、現實に立脚した實行手段が有つてこそ、眞の理想と言ひ得るもので、現實を離れた、實行の伴はない手段方策は、即ち空想であつて、理想と言ふ事は斷じて出來ない。

右の理由で僕は、所謂現今危険視されてゐる思想の大部分が、社會科會の範疇に屬しながらも尙、その社會科會としての研究方法乃至は、その實現への道程が合理的でない點が見られるのは、實にそれ等研究學徒の爲めに惜むべき現象で、科學の雰圍氣に生き科學の力を以て人生の福利を増進せんと努力する者として、その研究の根本的態度を社會科學の本質に還元する事が必要であると思惟する。そして眞面目な研究により現代社會の缺點を改良し、吾人の文化的道德的生活の向上を計るこそ眞に望ましい社會科學者の立場であらねばならぬ。

宗 教 偶 感

神の否定か肯定か

『宗教は科學の敵なり』とて極力宗教を排斥せんとする科學者なる

が故の無神論者あり、『宗教は民衆の阿片なり』とてイベリヤ神母の殿堂の壁に唯物史觀の立場なるが故に刻み込んだマルクス主義の徒輩あり、而して如何に彼等が熱心に眞劍に神の實在を飽く迄否定し、堂々と神への挑戦をこれ事としてゐることよ。

されど、彼等の叫びたるや、果して彼等が心底よりの眞實の進りと云へやうか。

否々彼等にして、冷靜に自身の胸に問ひ、自己の人間性を熟視せんか、その心底に横はる或るものと明にそが矛盾、牴觸あるを看過し得ないだらう。

然り、總べての事象をその五官に訴へて機械的に取扱はんとする科學者も、遂に何かしら科學のメスのみの研究の儂なさ、物足らなさを感じて、其處に何等かの形に於て神への認識をしやうとしてゐ

るではないか。

又マルクス主義が神（ゴッド）に對して其の存在を否定はしてゐるものゝ今や同主義者舉つてソヴェット共和國の始祖レニンを神化しやうとしてゐるではないか。否キリスト教をさへ容認しやうとしてゐるではないか。其處に彼等の大なる矛盾の介在を否定し得ないのである。

詰るところ人間の本質的要求は『神』への憧憬(worship)であり、偽はらざる真心の叫びは超人的自然力の肯定であり、認識であり、是認であり、生命創造力を『神』なりと思惟する宗教の参加により永遠の謎『生命』てふ問題も闡明されるものと言つても過言ではない。

偶像崇拜に就て

吾人は宇宙の大生命即ち『神』の本質を自己の生命を通して觀念しやうとする換言すれば人々の心を通して其自然の神秘力即ち『神』への認識をしやうとするものである。そして人間は人間以下の何ものでも無いと同時に、人間以上の何ものでもないが故に先づその宇宙の大真理若しくは大生命即ち『神』なるものを觀念の上に於て書き出すにあたり、人間的所産のあるものを念頭に先づ閃かすは蓋し止むを得ぬ事であらう。そは或は肖像となり、筆跡となり、十字架となり、遺物、形見の類となり表現されるもので、これらのものを前に跪拜するが故に直ちにそれを偶像崇拜なりとて非難、排斥する者があるならば、自分の名詞を土足にかけて踏みにじられても何等それに關涉する権利を有しない輩である。

要するに、吾人は『神』なるものを己の心を通じて見やうとする

もので、その心はやがて人間的偶像創造への衝動を喚起し、その創造物を通じて『神』への信仰を一層具體化せんとする只心の問題であつて決して偶像そのもの、盲目的崇拜とは思惟しないものである。

スメラ・ミコト・

我が民族は古來『言擧げせぬ』即ち理智に任せて理窟を言はぬ國民である。この思想は、やがて 天皇（スメラ・ミコト）を仰ぎ奉つて『生き神様』てふ觀念も生じたもので、彼の國學の大家本居宣長先生は『眞のことはりにかなひて、天地のかぎり、堅にも横にもゆき通り足はして、動くことなく變ることなき大御名にはありける』と説かれてゐる。而して『大君は神にしませば』とて古來、天皇を神視し稱へ奉つたのは蓋し單なる尊敬に對する形容の語でもなければ、

作爲でもない、只々一切の理窟を超越した一つの信仰である、宗教である。

宜なる哉な吾々日本國民が事苟くも 皇室の御事に及べば常に自己を鴻毛視して、何かしらそこに涙ぐましい感激の油然として湧き出すものあるは蓋し理論や理窟では決して解決出来るものではない。總べての理窟抜き超理論的觀念のみに依りて又獨り日本人のみの味ひ得る神秘的信念即ち立派な 天皇を『現人神』と神視し奉る宗教でなくて何であらう。そして我が大日本帝國の 天皇（スメラ・ミコト）は英國の Emperor なる觀念でもなければ、佛國の Empereur でもない、伊國の Imperatore でも無論ない。それかと言つて基督教のゴッドでも、佛陀でもない。一天萬乘の我が大君なる天皇はどこまでも天皇（スメラ・ミコト）であり、『現人神』であらせらる。そして

それは吾々日本臣民たるもの、無上の光榮であり、大なるプライド
であらねばならぬ。

何ごとのおはしますかは知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

地獄極樂の有無を論ず

人間の死といふ事が、必然的のものである以上、これに伴ふ、未
來の世界、地獄極樂、天上と地上とに關する問題は、世界の有らゆ
る有力な宗教の古來より教ふる處で、此來世觀を若し否定するなら
ば、其宗教全體の存立を危うするに至る關係上、來世といふ事は、
宗教の常に中心問題として、重要視されてゐる。僕は、何も宗教を
研究したわけでもなく、宗教を云々する立場にも、又それだけの頭

腦も持ち合はせてゐぬが、それ程までに、問題視され、又それ程人
口に膾炙されてゐる地獄極樂てふものの存在の有無乃至は、實在し
得る可能性の有無を、ほんの常識的に考察して見たいのだ。僕をし
て結論的に言はしむれば、地獄極樂は未來に於ても實在し得るもの
と斷定する。何となれば、哲學上の過去と云ひ、現在と云ひ、未來と
云ふも、皆一様に兩極の無限なる時の流れ、換言すれば、時間の一線
上の區分に過ぎず、何れも時の流れを前提としてのみ考へ得らるゝ
もので、唯其一點即ち人の現に生を受けてゐる世を現世或は現在と
言ひ、此一點を境界として永遠の過去と、永劫の未來とが結び付け
られて時の流れを形成してゐる。而して、過去と未來の時間的永遠
性に比すれば、吾人の生を受けてゐる現世の時間的意義は、問
題にならぬ程小且短なるものであらうが過去未來と同様同一時間的

線上の問題で、只その區分上便宜上の名稱に過ぎぬから、時の概念中に皆包含されてしまふ。極端に言へば、過去も無數の現在の連結に過ぎず、只その現在が時の流れに洗ひ去られて、即ち時間の経過で、打ち消されたものゝ連りを過去と言ふのである。又將來も現在に時の加つた現在の集合的系列に他ならぬ。故に吾人の今現に生を受けてゐる一點に於ける絶對の眞理は、恐らく、過去にも、將來にも響くものであらう。されば、過去將來を論ずるに先つて、現在の眞理を過去の發生的研究に照しつゝ、考究する事によつて、其れの絶對性を容認し得るに於て、將來への推理的適合を施すのが、最も合理的と思惟する。而して、如何なる宗教も、未來を説き、來世を教へつゝ、しかも其の來世觀念たるや明に現在に即した來世であり、未來である事は現實を離れた宗教の宗教としての價値の如何に低級

なるものであるかを知る時闡明される。そして、來世の思想、従つて地獄極樂の觀念も此現在社會と密接な交渉を以て生れ出でたものに外ならない。何となれば、第一は、人間の現世の瞬間的生命の短きを歎きて來世の永遠的生命への追求へと向はしめ、第二は、現世の賞罰の不公平を、來世に於て、明にせんとし、又來世の賞罰の存在の明示によつて、現在生活を紀律正導せんとする思想より出たものである事を見る時、現世てふものを常に念頭に於ての教示たる事を肯定し得る。そして吾人は、翻つて現世の眞理を直視するに、そこには、確かに、地獄も極樂も存在してゐる事實は、彼の法律上の犯罪のみならず道徳上の罪惡による良心の呵責のある處、そこには、必ず此世ながらの地獄があり、反面に、積善の家に餘慶ありの道理の如く、人としての道を全うして神への一步の接近をなした時に、

そこに現實の極樂も展開せらるる。斯くの如く吾人の實生活に徹して、現世に地獄極樂の見出さるゝ事は誰が否定し得ようぞ、然らば、當然の歸結として、來世に地獄極樂の存在するを否定する理がない。故に僕は、未來に地獄極樂ありと斷言しても過言ではないと思惟するものである。

貝島と生氣

私は常に生氣と貝島との關係を以下述べる様な意味で見、獨り貝島の會社のみならず、是が生きた手本となつて、他の會社が私等が貝島の會社に生氣を普及した主旨に倣ひ、産業平和を確立し、人類愛を高唱せん事を切望して止まぬと同時に、我貝島生氣團の使命の重大なる事を痛感するものであります。

天然の資源に資本力に貧弱な我國が、環境的に有利な歐米諸國と

競争し、より以上の國力を發揚するのは極めて至難の事に屬する。

然らば如何にしたならば此問題を解決する事が出來やうか。吾人は言ふ唯人力あるのみと。人の力は實に人の和を根底として始めて力強く發揮されるものである。然るに軌近動もすれば此唯一の資源たる人の力、従つて人の和を攪亂する幾多の事實が各地、各社會、各階級を通じて見られる事は否定し得ない處である。

具體的に云へば、社會各員の利己主義的色彩が濃厚になるに従つて各自の間に有形に無形に利害の衝突を招致し、或は社會構成の單位たる家庭の平和を破り、廣くは經濟的利害衝突の結果は勞資の問題を惹起し、爲に生産能率は低落し、ひいては一國の浮沈盛衰にかゝはる事になる。斯の如き國家的否世界的大問題に直面して、之が對策として或は消極的に或は積極的、能動的に種々な方策施設を設

置しつゝあるのであるが、何れも遺憾ながら根本的解決策と断定し得るものは先づないと謂つてもよい。

茲に於て吾人は先づ此問題の發生原因をも少し詳細に考察する必要にせまられる。

元來人間は或程度まで感情に生る動物で、それは吾人の日常生活に徴しても、理性的に批判的對度を以てする行爲は極めて僅少で、大部分の行爲行動は感情乃至は本能に無意識にしてゐる事を見ても明に肯定出来るのである。斯くの如く感情に生ける人間が各自勝手氣まゝに自己の慾望の充足にのみ汲々として他を省みない時、他との衝突は避くべからざる者である。此事實は狭くしては家庭、廣くしては社會的問題の一大源泉をなすものと謂ふ事が出来やう。然るに老若男女の區別なく、和氣霽々の内に健康の増進を計り得る生氣

は家庭を圓滿にし、各自の融和を來す事は言ふに及ばず、近世的分化産業の結果は社會を益々複雑化し、同一系統の會社に屬する各員も、その規模が大になればなる程、互に接觸し親しきを得る機會が少くなり、全體的に見通のきかぬ換言すれば企業全體の進行に暗くなると同時に、人的要素は滅殺され、唯々一個の機械の如く黙々として自己の仕事に追はれる結果は、事業否その自己の受持の仕事さへも無味乾燥となり、會社に對する親しみ並に各員間の意思の疏通を缺き、自然會社全體の活力にも影響する事は論を俟たぬ處である。然るに吾貝島系統の會社の如く、歸宅前一時間乃至半時間、一堂に會して上下の區別なく皆一様に白い生氣服でお互にごろ／＼やるのは、單に表面的にはかうやつて一日の疲勞をとり、心地よい所謂湯上り氣分で自宅に歸る事が出来るといふ單純な現象であ

るが、その裏面にもつとつと深い或るものがあるのではなからうか、或は重役が小使の肩を揉んでやる事もあらう。或は頼みも頼まれもしないのに氣分の悪い人には誰か々誘導してくれやう。病人でなくともお互に揉みつ揉まれつしてゐる間に、知らず識らず親密さを増す事は事實で、實際生氣でごろ／＼やつて居る間は、お互に子供の境地である。此境地こそ眞に此世の極樂とでも言ひたい位である。寝ころんで話してゐる間に自分の専門以外の新知識或は社會相を吸収する事も出来やう。

之が固い／＼團結の基礎となり、やがて會社の活動力となつて迸り出づるものである事は斷言して憚らぬ處である。

次に話を少しく擴張して我貝島の山口講習會に就きて考へて見よう。

一週間或は五日間、彼の仙境山口で温泉にしたりながら、一切の社會生活から離脱して業務を外に、生氣てふ同一目的に向つて同じ釜の飯を食ひ、同じ白い服、同じ生氣道場で、奈倉先生の御熱心御懇切なる御指導の下に生氣に精進する間に、初めは同じ貝島に居ても顔も知らなかつた各會社、各支店、出張所、各炭坑の諸氏が、山口を去るに臨んでは、恰も十年の知己の如く固い握手を交しつゝ、東西に別れ行くとき、吾人は涙ぐましくさへなる事がしば／＼ある。そして此思ひ出は恐らく一生忘れられない記憶となつて諸氏の腦裏に深く／＼刻み込まれる事であらう。

更に話題を廣くして炭坑方面に於ける生氣の効力を説く事にしよう。

以上見た處は所謂知識階級即ち諸員相互間の問題であつたが、此

處炭坑では多數諸員と労働者がある事とて、問題は必然的に複雑にならざるを得ない。

併し之とても人間といふ立場から見れば以上と同一筆法で極く簡單に問題は解決する筈である。何となれば元來現時の資本主義經濟組織のもとに於ては、勞資二階級の對立は必然的のものであるが、それが一部論者の如く利害の衝突による抗争を前提とし、互に相容れず相反目するものとの主張は吾人は直ちに肯定し得ないのである。何故なら此前提の不合理性を看過し得ないからである。此前提はあまりに唯物的に人間と云ふものを見、そこに何等人的要素を換言すれば、温い人間味を包含してかないのみならず、此前提を根底から覆す事實即ち近時の世界産業界の趨勢が如實に語つてゐる處のものがあつては、いか。昔時資本家の利潤追窮的慾求の盛んにして、搾取

制度の亂發時代はいざ知らず、今日の資本家にしてかゝる不合理な私慾追窮的態度に出る者は殆んど無いと謂つてもよい位で、又社會的制裁は間接的に資本家のかゝる行動を抑制してゐるのである。彼の英國の經濟史の如きは徹頭徹尾勞資抗争の歴史であると言つても過言ではないが、現今悩み悩んだあげく、抗争は行き詰りの形となり、抗争に代ふるに平和を以てせざれば双方自滅するばかりだと云ふ事に氣がつき、精神的に始めて覺醒の端を開き勞資協調的氣運が濃厚になりつゝある事に徴しても。本質的に勞資は抗争を前提とする者に非ずして、互に提携して相補ふ力である事を認知し得るのである。

故に資本家は労働者の福利増進に力を注ぎ、温い情誼を以て之に望み、他方労働者も資本家あつて始めて生活の安定も得らるゝとの

觀念のもとに、共存共榮的態度に出るの結果となる。併し茲に問題となるのは資本家が労働者の福利増進の爲に用ふる手段であつて、無暗に物質的に偏し、例へば勞賃の値上げ等にのみよるのしかへつて弊害を生じ、又物質的のみでは到底あく事を知らざる人間の慾望の無限性に對し満足な結果は得られない。故に一方に於て精神的即ち相互的温情主義、換言すれば温き人情味がなければならぬ。併し重ねて問題となるのはその具體的手段に於てである。相互的温情主義と云つても、今日の如く勞資の懸隔がある社會に於ては、互に接近する機會が少いので、互に心の中では思つてゐても、之を具體化して相手に知らせる所謂形式的方法に苦しむのである。資本家がまさか労働者の足をさすつてやるわけにも行くまい。處が生氣なら此一見實在し得べからざる現象を極自然に平易に出現するのである。

即ち生氣を通じて人間味を如實に表現し得る處に生氣の生氣たる所以が存するわけである。

それから小學校あたりで先生が稼働者の子弟を生氣によつて病氣を治してやる。又は醫術で施す術のない病人も生氣によつて病院で治してやる。それ等が生氣の労働者への普及法の最適最良のものである。さうすれば労働者も生氣に知らず識らずの間に好奇心を持つて来る。労働者の要求が高まればそこで會社も之に反響して労働者の道場も作る。そこで労働者と事務員が、ごろ／＼やる處まで行くその間に云ふに云はれぬいゝ空氣がみなぎる。之が吾人の理想とし最終の目的とする處で、之によつて表面には勞資に階級の嚴然たる對立があつて企業が統一的規律的に進行し、裏面に於て生氣により結びつけられた人間對人間の固い固い握手があつて、初めて彼の醜

悪なる階級闘争も根絶し、人類平和を確立する事も出来るのである
起て！生氣團、世界人類平和のために！！（生氣小品集より）

生命と生氣

「生命」……學問の終極は、皆なこゝに立ち到る。そして其れは人間
への課題としては、あまりに大きすぎる。あまりに六ヶ敷すぎる。
けれど古からこれが謎を説かんと人々は集つた腕いた苦しんだ。し
かし遂にヂュ、ポア、レーモンをして Ignoramus et ignorabimus とはき
出させた。

生命の問題の解決は永劫に人生への宿題として残されるのであら
うか。生命の本體が知り得ざる程奥深いものであるが故に研究對象
としての妙味もあるわけで、人間の智識慾を唆つたのも蓋しここに

起因してゐると思ふ。とまれ生命研究の幾多の思想的變遷は、要す
るに機械説と生氣説との争ひにすぎぬ。

ちやうど時計の振子の様に、或時は前者が、次には後者かど、一
勝一敗の歴史を繰り返して今日に及んでゐる。そして科學の立場か
ら生命てふ問題を考察するならば、機械説に桂冠を與へたい様に思
ふが、宇宙の神秘が只科學の力にのみ立脚して闡明されるであらう
か。

成程生命の機械的方面は確實に把握されなくてもなからうが、生
命の生命たる所以の根本的解釋の出來様筈がない。

否々、科學が進歩すればする程、自然界の神秘の奥深い事に驚異
の目をみはる事になり、そこに科學の分野以外のスタンドポイント
を以て新たに事象をながめ直す時が来るのではなからうか。

そこに始めて吾人の所謂新々生氣説の研究をして意味づける何ものか、介在するものと私は信ずる。(生氣小品集より)

鳥のやうに

人間は、ずっと昔から、大空をながめては、鳥の様に、自由に飛んで見たいな——と思つた事は蓋し、人類の慾望の無限性を如實に表現したものと云へませう。今から二百年前に書かれた未來記中にも、人も鳥の様に羽を生じて、飛行する様になると豫言したさうです。ところが、どうです、人間の空への憧れは、驚異すべき科學の發達が、とう／＼解決しました。

そして、ライトが始めて飛んでから三十年足らずではありますがその間の長足の進歩は、此方面に極度に進歩の遅い我が國も、今夏

(昭和四年七月十五日)から愈々旅客輸送までやる運びになつて、毎日、東京福岡間を、フォッカーのスリー、エンジンがブン／＼やつてゐる事實は、所謂飛行機の實用時代への第一歩とも云へませう。けれど、私は、思ひます。まだ／＼人智は、現在では、満足し得ないものが幾多ある事實を看過し得ません。そこで、少々、私の近い將來に於ける、飛行界の豫想を述べる事にします。しかし、未來の空界の豫言は、仲々至難な事で、現今の空界の真相を確實に把握して始めて云々し得るものでありませうが、『思ふ事言はざるは、腹ふくるるわざ』ですから私の私見をものして見る事に致します。

現在の航空機中には、特種の構造のものもありますが、最も中心的有力さを示してゐるものは何と言つても、ガソリンエンジンの所謂發動機付の音のやかましいあの飛行機である事は、子供に、飛行

機は？ と問へば直ちに、ブーン／＼と答へる事實が證明してゐます。そして、ガソリン發動機の飛行機は、未だ、改善の餘地が無いでもありませんまいが、先づ、現今に於てすら少々行き詰りの状態にある様です。しかしこれとても未來に於て、その構造上、或は、翼の厚翼化、機體の金屬化等によつて、一方には、尙消費量の少い、輕飛行機が、一方には翼面積數百平方米、全重量數十噸、數千馬力の多發動式のもものが、出現して、日常の用たしには、前者が、自轉車代用として使用され、後者は、専ら、長距離の旅客用として活動するでせう。そして、高空用と低空用、高速用と低速用のもものが發達すると同時に、中間的のものも進歩する事とせう。尙ヘリコプター及びオートジャイロの全盛を來して、屋上から、中庭から、自由自在に發着し得る様になるでせう。

しかし、以上の發動機付のものは、いくらその發達の極に達しても先が見えてゐます。しかるに、各種燃料或は、原動力の新發見により、推進機關の革命を來して、或は、無音飛行機に、或は、電波操縦の飛行機に、或は、氣流を追ひつゝ飛行する無發動飛行機にと進展して、それこそ眞に、絶體安全な、乗心地よい、理想的利器の出現は、さまで時間を要せずとも解決される問題だらうと思はれます。

その曉には、各國の空中網は、高次の發達を示して、巴里で朝食、東京で晝食を攝る様な、高速のものから、一寸夕すゝみにどれ飛行機でと言つた具合式の家庭用の小さな、しかも、低速度のものも出來て、人類飛行の普遍化が實現され婦女子も些の不安を感ずる事なく、雲上の曇らぬ月を眺め、白雪を戴く高峯を瞰下しつゝ、『ラヂオ』

による音楽を天來の妙音と心得て、楽しく愉快に飛行を續ける時代になるわけであります。

五八

温故知新

論語に、子曰、温故而知新、可以爲師矣、とて、温知といふ事を教へられて居ます。併し私共は兎もすると、前方の凝視をのみして、何等事象の過ぎにし方を振り返つて見ようと致しません、そして新しさに憧憬し、新しさを目標として、これを無暗に追求する事に之日も足らない有様で、古きもの自己のものは更に放擲して省す、やれデモクラシーの、唯物史觀の、社會主義の、共產主義のと、全く彼の思想の善惡正邪を吟味する暇もなく鶉呑みにして、薄べらな新しさを追つて、それでモダンだと心得てシャ／＼として御座る

新しやも居ます。これも時代思潮と言へば其れまでですが、蓋し、明治、大正の歐米文化吸収時代はいざ知らず、現代の我が國は世界を救ふ新文化開拓の爲めに有らゆる努力を要する文化的思想的維新に時局は展開され、私共はその艱難に直面してゐます。故に、宜しく私共は、幸ひ我が國古來よりの調和性乃至は同化力の強大さを以て、是等幾多の海の彼方よりの輸入ものを、よく打つて一丸となし、これを日本化してしまはねばなりません。そして徒らに彼に求める事なく自己に求め自己的意識を明確にして、他の長を採り、新しきを吸収する様にしてこそ眞の新しさも在るわけであります。換言すれば、古きを基礎とした新しさが眞に好しい事を私共、知らねはなりません。

恩師奈倉先生は申されました。『古きものは、飽くまで古く、新し

五九

きものは、飽くまで新しく』と。然り！古きを知り古き美點は飽くまで之を保持してこそ、始めて新しき道理の樹立も可能なる所以は彼の英國が、新しきを求めつゝも一方容易に歴史的事物を精神的に物質的に破棄しようとしなない事實に徴しても認識し得る處であります。そして現代の日本人が此様な考慮ある行爲行動を果して、してゐるでせうか。

私共は、新しい事實の發明發見により直接間接に恩恵を蒙つてゐる事は、彼の科學の進歩が、人に與へた澤山の顯著なる文化的事實を見ても直ちに肯定出来るのであります。と同時にそれらの新しさは飽くまでも古き確固たる礎の上に、吾等の智力の極、文化の極を盡した摩天閣の設立であつてほしいのであります。所謂古きを念頭に置いた新しさの建設こそ、昭和青年の一大使命ではありますまいか。

最後にもう一度申します。

古きものは飽くまで古く、新しきものは飽くまで新しく！と。

花より團子

曰く、人間とは兩脚のみにて歩行する動物なり。曰く、大脳の著しく發達せる動物なり。曰く、加工器具の使用をなし得る能力を有す。曰く、火の使用を知る動物なり。曰く、言語と文字を有するものなり。曰く、故意に自殺するものなり。曰く、何々と……數へれば枚擧に遑ない位人間と他の動物の異なるところ換言すれば、人類を動物より切り離して特徴づけ人類を萬物の靈長たらしめた構造上乃至は習性上の特徴は多數あげる事ができます。けれども人類を最高の地位に置いた所以はこれらのものより更に精神的方面のそれに

與つて力あると思ひます。

即ち、或は社會的の動物なる事とか、或は良心的意識の發達せる事とか、自己を意識する事等、精神的の特徴も蓋しその數に於て前者と同様多い様であります。

就中人類は理性的動物で思想並に理想を有し、そこに哲學も科學も生ずる所の特性は、よく人間をして動物進化の最高の地位に躍進せしめた力強い理由だと思ひます。要するに右に見た様な靈的特徴の諸點は、他の動物の絶體に追隨を許さぬ人間のみに許容された特權で、これあるがために人生も意義づけられるもので、私どもが萬物の長なりとて大きな顔も出来るわけであります。

これだけの前提のもとに古くから人口に膾炙されてゐる『花より團子』てふ言葉を少々吟味して見たいと思ひます。それを只無邪氣

に私どもの様な無風流ものを表象する俗諺として見ればそれまで、
すが、その反面に横はる人間性のあるものを穿つたものとして、詳
言すれば、所謂恒産あつて恒心あり、人間も動物である以上、先づ
饑れたるものには食物を與へ、病めるものには樂を與へざるを得な
い。そして饑れたるものは只一片の同情心丈では到底満足するもの
ではない。即ち先づ吾人にパンを與へよ！ 式の解釋を與へるに於
ては又別の意味を招致する事になります。

成程、人間は元アメバーより進化し來つたもので、その本質中に
もそうした原始時代の遺物が皆無とは申されません。確かに私ども
は不幸にして野蠻時代の下等動物の痕跡を肉體的に精神的に幾等も
所有してゐる人面獸心的習性がなきにしも非ずであります。彼の自
然で本能的なる食欲と性慾とに或程度まで私どもは支配されてゐる

事實は否定致しません。だからと言つて、直ちに『花より團子』的の人生觀を私どもの人生へ當嵌める事が可能且つ合理的なものでせうか。否々私どもはそれを如何にしても肯定する事が出来ないのではありません。何故なら、私どもの所謂本能なるものが今の文明時代に於ては既に廢退性のものとなつてゐる事實否寧ろ私どもの社會に害毒を流すものごさへ思惟されるに至り、その動物心を善化し、眞の人間の所産への憧憬が今日の文化であらねばなりません。『人間の心は神と動物との格闘場である。』とは蓋しここを言つたものと思ひます。

故に成程生きんが爲めには食ふ事の必要な事は人間が動物の範疇を脱しない限りに於て確かに眞理であります。けれども私どもは動物であると同時に更に人間である事を知り生きるために先づその生きる目的を考へて見たいのです。換言すれば人生は只漫然と生きん

がための人生ではなく、人生の目的のための生であり、理想のために生きる事が肝要であります。何等の目的も理想もなくして徒らに食つて生きるは豚犬に何等異りません。そして孟子の『恒産なくして恒心あるは惟士能くす。』と言つた様に難いには相違ありません。けれども折角人として此世に生を享け他の虫けら、同然の生を送るのは私どもの欲するところでは斷じてないと思ひます。

そして「食すには生きられませんが、若し食ふものがなければ、理想を實現するために乞食となります。決して盗んでまで生きようと思ひません。けれども乞食しても憐む人がなければ家族を擧げて餓死するまでです。」と言つた木村徳藏先生の言葉は強く私の胸裡にあるものにふれました。然り！その心こそ人間を價値付けるに充分なものご云へませう。

要は、人生の進化がもたらした生きるがための目的即ち人生観なる花が先で、生きる、云ふ團子が、後になつて來たもので、斯うした考察を否定する人は、唯物主義の奴隷になるより他はありますまい。そして私どもは先づ人間といふ意識を濃厚にして、常に人間を念頭に置きつゝ、益々『善』に進み、少なりとも神への接近を心願と致したいと存じます。

相互的温情主義

相互的温情主義——何と麗しい言葉ではないか。然るに労働問題に對し温情主義を恩恵主義や、慈善主義に解釋し或は労働者が無自覺である中ではかうした政策も行はれるが今日の社會には適應し難いとして、無暗に排斥する人がある。併し文字通りに温き人情味を表しお互に温い情誼で資本家は労働者を思ひ労働者は資本家を思つて人道上面白からぬ問題を起さずに行かうといふのが何故悪いのであらうか。

現代の複雑化した社會問題を複雑の中に科學的に理論的に解決を求めんとするのは其繁にたへないから、先づ其等諸現象を單純化して見る必要がある。換言すれば人間其のものを見る必要があるのである。元來人間は或程度まで感情に生きるもので、社會生活の全般を只權利義務の觀念のみで律せんとするのは餘り冷酷で到底圓滿に行くものではない。

少くとも資本主義制の現代にあつては資本と労働とは相補ふ力で両者が分離して居ては何の役にも立たぬが結合すれば強力なる力となつて現るゝものである。故に資本家は労働者の人格を認め温き情

義を以て是にのぞみ労働者は資本家あつて始めて生活の安定が得られ安んじて生産に従事し得との信念のもとに労働する事により生産の全能率は發揮されひいては國運の隆盛をも來す所以である。

特に我が國の如く天然の資源に資本力に貧弱な國に於て環境的にめぐまれたる歐米の産業界に匹敵してより以上の成績を示すには、人。の。力。による外途がない。人の力の根源は人の和にある。故に吾々は宜しく小我を捨て、大我につき相互的温情主義の『モットー』のもとに彼の醜惡なる階級闘争を根絶し以て産業平和を實現すべきである。

新 勞 資 協 調

(一)

惟ふに、資本主義經濟組織のもとに在つては資本と労働とは相補

ふ力で、両者が分離して居ては何の意味をも有しないものであるが結合すれば、強力な企業の生産的原動力となつて現れるものである。

然るに産業革命以後の勞資の懸隔は、双方の經濟的利害及び感情上の衝突となり、或は、意志の疏通を缺き、相反目するに至り、物價の騰貴並に一般労働者の生活程度の向上は、賃銀の増加を要求し、加之從來の家族的従關係即ち温情主義は破れて、個人主義的風潮は世を風靡した、其時に當り、労働問題てふ難問は、喧唱せらるるに至つたのである。炭礦労働者も其餘波を蒙り、近時動もすれば、勞資の協調を阻碍し、人心を悪化し、産業政策上憂慮すべき傾向のものあるは、否定し得ない事實である。勿論労働者が機械視せらるゝ事に反抗し、人格的價值を認められん事を要求し、文化生活を享受しやうとするのは、蓋し、人間としての必然的要求で尙又吾々社

會の今日の文明の華は、恰も清く美しき櫻花を咲き出さんが爲に、日の目も見ざる土の下に營々として働く根の努力あるが如く、地下何千尺の暗所で晝夜を分たず採炭する人々の努力の賜である事を忘れてはならない。故に種々の意味に於て弱者たる労働者階級に心からなる同情と感謝の念を以て、労働條件の改善に、労働者の生活の安定に企業家及び社會全般が留意する事は當然と云はねばならぬ。然し、茲に注意を要する點は、單に賃銀の値上げや、労働時間の短縮等を以て、要求の主眼となし、退いて、其労働能率と、産業一般上に及ぼす影響を顧す、換言すれば一面に於て權利を主張する代りに、他面に義務あるを忘れ、能率は減退し、遂には總べての産業の原動力をなす該業の不振を招致し、國家的損失を醸す事とならんか、其結果たるや實に恐るべきもので、斯の如きは眞に自覺せる労働者の行動と言ふを得ないのである。

『國家の進展は、鐵と石炭を中心として廻轉す』とは、彼の鐵血宰相ビスマークの言である。

然り！近世産業革命以來の世界列強の國運の消長は、明に之を語つて居るではないか。

實に、石炭は、文明社會の基礎であり、源である。然るに、我國の如く天然の埋藏量に、資本力に、貧弱な國に於て歌米の環境的に有利な諸國の産業界に伍して、能く其富強と繁榮を維持、伸暢せんとするには、他なし唯人力あるのみ。人の力は、人の和を根底として實現する事が出来るものである。

故に宜しく、勞資共に眞に自覺して、彼の醜惡なる、階級鬭争を根絶し、以て國力の培養に努むべきは、論を俟たざる處である。

(論文より)

新勞資協調 (二)

一般に、労働者を考察するに當つて、單に生産の一要素として見る場合と、人間として見る場合は、そこに結果に於て著しい差異となつて現れるものである。前者を前提とすれば労働者は一ケの物品として、機械視せられ單にそれは生産上必要な機械に過ぎないものとして何等そこに人的色彩を帯びない事になり、彼の奴隸經濟時代に於ける奴隸の如く人格は更に認められず、唯々一ケの物として雇主の下に在つて、その酷使に甘じなければならぬのである。而して斯の如き觀念、は産業革命以後の所謂近代的産業組織の下に在つても、相當力強く作用したもので、奴隸程に酷使されたわけではないが、到底人間として、換言すれば、人間らしい生活をすることは、

不可能で、慘めな状態を出づる事は出来なかつた。殊に十九世紀から二十世紀の始めにかけて此世界的の産業界の進展は、實に目覺しいもので、産業組織は、複雑化し、大企業は、雨後の筍の如く起り而して資本主義的物質文明の世界は、展開せられ、文化の花は、茲に咲き誇つたのであるが、其裏面には、自由のない、或は在つたとしても唯名のみ労働者の血と汗と涙が流されている事實を誰か否定することが出来やうか。此悲惨なる労働者の苦痛を如實に描き出したものは、彼の佛國革命當時の工場の状態である。當時は、資本金家の利潤追及的慾求は、遂に五つ六つのいたけない幼児まで工場労働に使用して一日十五、六時間も綿屑に或は塵埃に塗れて、労働し、連日の疲れは、彼等をして、機械の上によりか、つて、はかない夢を貪らしむるまでに心身を酷使し再び立つ事の出来ないまでに至

らしめ、實にその慘狀は、目もあてられぬもので、人間世界の最も涙含ましいものであつたに違ひない。斯の如きは過去に於ける労働者の生活の真相で又その生活の縮圖とも見る事が出来るのである。併し社會一般の向上と労働者の自覺とは必然的に資本家に對する反感となり集團的勢力を以て之に當らんとしたのであつた。

歐洲大戰を一新劃紀として、世界の労働問題は、著しい變化を遂げた。即ち資本主義經濟對社會主義經濟の對抗、資本家對労働者の深刻なる階級闘争の連續で、換言すれば、近年に至るまでの勞資關係は、抗争の二字を以て盡きて居ると謂つても過言ではない。

例へば彼の英國の經濟史は、殆んど勞資の抗争の列記に過ぎないもので、一昨年(一九二六年)の炭坑罷業は、その頂點に達したものである。而して其結果生じた打撃は、甚しいもので、労働日で、計算した

損失日數一億六千二百七十八萬四千日、英國の其七ヶ月間に亘る罷業による直接間接の損失は、實に四億萬ポンドに及んで居るといふ而して其爲め産業の不振を招來し失業者は増加し、國家的に物質上精神上に蒙つた、損失は非常なもので、今や抗争は、行詰りの形となつて、反動的に抗争に代ふるに平和を以てせざれば、双方共に自滅するばかりだといふ事に氣が付き、精神的に始めて覺醒の端を開いたのである。

一方米國の勞資關係を見ると歐洲(殊に英國)とは様子を大分異にして居るのである。即ちそれは、抗争的要素よりも多分の協談的要素を具備してゐる事である。元來米國の勞資は、労働運動に關し、英國のその如く抗争的ではなく、實際米國の勞資は、共存共榮を目標として、手を握って行かうといふのである。

故に爭議等は、出来るだけ少くして、双方の利益を計る様に努力している。而して其結果は、英國をしてしみぐと米國を改めて眺めしめる様になした位、産業發展上に好結果を齎して居る事實に徴しても、近年歐米の大勞が、抗爭より平和へと向ひつゝある事を推知するに難くない。

以上見た如く今や世界の趨勢は、新勞資協調運動へと進展しつゝある今日、獨り我國の勞資關係を見る時、そぞろ寒心に堪へないものがある。蓋し我國に於ては、動もすれば、抗爭的激越な直接手段に訴ふる傾向が、近年各方面に著しく見らるゝ事實は、實に歐米の制度、而かも今や過去の遺物たらんとする制度の盲目的模倣で、不可なる事は論を俟たぬ。而してあらゆる文物制度に後進的な我國に於て、歐米の進歩せるそれら模倣するといふ事は必ずしも咎むべき

ものではなく、又實際五十年の短日月によく世界の一等國に躍進せしは一に此合理的模倣に俟つ處が多いのであるが、是が模倣に際しては充分慎重の態度を以て之に臨み時間的、場所的差異のある事を念頭として、彼の長を取り己の短を捨て、我國體に照して適當と思はるゝものゝみを採用し以て是等を日本化する事に心懸けねばならぬのである。彼の我國の憲法の如き、其制定に當り彼地の憲法なるものが、其施行せらるゝに先ち、幾多の流血を閲した通り、我國に於ても斯の如き歴史を踏まねばならなかつたとしたら如何であつたであらうか。斯の如き問題に對しては、誰しも疑をはさむ者はないのである。然るに我國の勞働運動が此種の賢明なる方策を取りつゝあるであらうか。而して歐米の勞働運動が今日の域に達するに先ち經驗せる幾多の慘苦失敗の歴史を更に繰返さんとする傾向が、それに

見らるゝのは吾人の最も遺憾とする處である。

七八

要するに、吾人は宜しく我國の歴史、國體及び現在の我國の社會状態を明にし、世界に於ける我國の地位を明確に自識し又廣く世界の生産界の現勢を直視して、産業平和を確立し以て我國威を益々發揚せんことを希望してやまぬ次第である。(論文より)

思ひ出草

恩師のことごと

金子先生

私は、小さい時から、身體が弱かつたので、小學校の頃は一年の中床の中で暮した日の方が多かつた様でした。それで學校も私としてはほんの遊びに行く位のもので、私には、初等教育はほとんど無いと言つても過言ではありません。面白いのは、その頃の學校の成績表です。(これを通信簿と申しました。)算術、讀方と言つたものは先づ甲でしたが、體操は、常に乙でした。何故なら、體操は見學ばかりでしたから。又全然成績が書いてなく、只『本學期間全缺席につ

七九

き採點行はず』と書かれてある學期もたまにある位、學校に行つた日數が少かつたのです。それで學年末の賞品をいたゞく時も二等にはなれましたが、如何にしても一等にはなれませんでした。元來弱いくせに勝氣な私でしたから、たまたまなく残念でした。しかし、これと言つて病氣はありませんでしたが、一體に虚弱でしたので、無理が出来ません。無理が出来ないばかりではない、自然と臆病になつて實際その頃の私は、床の中に居る方が學校に行くより安定の様にさへ思へ、それに側のものもあまり神經過敏になつて、或時などそれがために病氣でもないものを體温器の過りのため三四日、苦し目にあつた事もありました。その様に弱い子でしたから父母は勿論學校側にも大へん御心配をかけました事は申すまでもありません。特に、私は、二年生の時一寸他の先生から教へられただけで一年か

ら六年まで、ずつと金子先生の御世話になりました。その間先生は、親の様な温い御心を以て常に常に弱い私を蔭に陽に愛しんで下さつたのでした。或時は、學校で、私の腦貧血を看護して下さいました。或時は、學科の補習を夜おそくまで、わざわざ私の家でして下さいました。或時は、校庭に出来た『グミ』の實を十ばかり下さつて、『お腹をこわさぬ様に少しづつ食べるのですよ』と申された時、實に嬉れしくて、飛び上つた事を記憶してゐます。こんな風で、獨り學問だけでなく、ほんとに、温い情を以て私を育て、下さつた事は、今も尙、いね／＼年がたつに従つて、外の記憶がうすれ行く中にクツキリと浮び出て、あの慈愛に満ちた先生のお顔が眼前に彷彿として、常に私を見てゐて下さるのです。種々の御恩恵を一々書く事は、到底不可能ですから、私が一番有難く一生忘れる事の出来ない事を

一つ申して、先生をお慰びする事にします。

それは、ちやうど私がどうやら香井田の小學校を卒業して、中學の入學試験を受ける事になった頃でした。私は前申しました様に、學校に出ない、従つて卒業はしたものゝ、尋常三年程度位の學力しか御座りませんでした。そこで父も母も勉強の必要を感じて居るものゝ、若しや身體に、それが爲めに無理が行つてはと、密かに心配してゐたのでした。ところがその時金子先生が『二十日間で、學科の補習をして、どうしても入學させて見せます。』とキツパリ申されたので、父も母も先生のあまりの御熱心と、御自信とに動かされて、只の二十日の所謂試験勉強を始めました。先生は始終私の健康に留意されながら、學校で、私の家で常に熱誠的な御薫陶を受けました。そして實は、私はその一ヶ月位前にも病氣で寝てゐたのでしたが、

約二十日で、どうやら四年五年六年の教科書の大切な所だけは、おぼろげながら解る様になりました。それから愈々入學試験となつて、三田尻の中學を最初に、次に長府中學を受験しましたが、その受験中にも先生は、一しよに行つて下さつて、何から何まで、御指圖下され、御世話下さつたのでした。その御蔭で、二つとも、どうやら入學が出来ましたが長府の方が近く又親類の家もあるので、長府中學に入學した様なわけであります。實にあの時位、先生の御恩を痛感した事は御座りませんでした。無一物の私をたつた二十日で、入學資格を與へて下さつたあの眞劍さ！ あの誠實！ あの愛み！ 實に實に眞に無限の御恩を蒙つてゐるのが私です。今も尙其當時の事を回想しては一人で、舊師への報恩の念が油然として涌き出づるものがあります。

横田先生

それから中學生とはなつたもの、少し勉強が過ぎるとどうも身體の具合が悪く、それに多少學科の方も無理矢理に入學したので、骨が折れた爲、その一年は休學の止むなきに至り、暑中休暇中、金子先生に百合野（私の家のあつた所）で、酷暑の折にも拘はらず、勉強してゐたゞきました。その翌年再び入學して勉強する事になりました。横田先生は、私の英語の先生とられました。そして、それこそ親切丁寧に一々ABCから嚙んで含める様に御教授下さいました。先生は、そればかりではありません。數學や國語・博物に至るまで私に手を取つて教へて下さいました。そして中學に入つても弱かつた私は、試験前になると性來の勝氣が、どうしても無茶な勉

強をするため、よく折角試験準備最中乃至は、準備萬端出來た頃、病氣になつて、床の中で、もたへながら、病氣は悪くなつても、試験を受けると言つて両親や、その他の人をよく困らせたものでした。そんな時も先生は、親切に、『學校の事は一切御心配はなさないで、一日も早く治つて下さい』と心から申されました。その爲めに私の非常識な考へも何時とは無しに幾度となく直された事か知れませんでした。又先生は、私に弓を教へて下さいました。又劍道も相手になつて下さいました。その様に私の弱かつた健康には、注意に注意しながら少しづつ鍛練すべく御指導下さつたのです。正月に先生は、いつも其一年間の私の心得を御書き下さつて、私の身心兩面の完全ならん事を考慮して下さつたのです。その文中の第一條は必ず、身體を本年は昨年より一層訓練する事の一條が見出されました。散歩

をするにも、旅行へ出かけるにも、テニスなどの遊戯をするにも常に先生は、私と行動を共にしつゝ、私を全人格を以て御教導下さつたのであります。先生の御恩の數々を一々挙げる事は、到底言ひ盡しきれない程ですから、私の最も感銘した一事を其れ等に代へて申す事に致します。

確か中學三年の二學期でした。學期試験の目前に迫つた頃、先生に幾何の問題の解らないのを十問ばかり御手紙で問ひ合せたのでした、ところが三四日して先生からの解答が來ましたが、その封筒の裏に、『避病院にて、横田慎治』とありましたので、私は驚いて、早速使をやつてお宅へお尋ねしましたら、お子さんがお二人まで、チブスで入院なさつたとの事で、そのお取込中にも拘はらず、直ちに解答を與へて下さつた先生の御親切は到底筆舌のよく及ぶところで

はありません。此一事はよく先生の御人格の一面を窺ふ事が出来るもので、今尙有難く心から感謝致してゐます。

右の様にして中學一年から五年間、それはくゞ何くれとなく御世話になりました、どうやら御蔭様で大正十五年の春卒業致しました。それから山商の入試もまあ無事済んで、高商生活の幕は切つて落されました。

奈倉先生

高商生活三年は、私にとつては色々の意味に於て、有意義なライフでありましたが、その中心をなしたものは、入學後間もなく先生からお習ひした生氣でした。先生は、よく私共に、一つの單語、一つのフレーズに就ても一々それを題材として、教科書以外の或は、

社會問題であるとか、或は時事問題だとか、或は、人格修養上の御訓話を諄々として、お説き下さつたのです。そしてお話が一度生氣の事にふれれば、ほとんど一時間をまるつぶしにしても其理論に其効驗にそれこそ鐵をも熔かす眞劍さを以て、私どもに御講話下さつたのでしたが、生氣に關して第三者でした私どもは、始めの中は、唯馬耳東風に聞きのがしてゐましたが、あまりの御熱心さに私どもの好奇心を唆つて、たま／＼石井先生の講演を友達と聞きに行くまでに進展させたのでした。それが昭和二年正月十四日でした。とんで十六日の日に先生のお宅へ參つて、正式に御教授を願つて、今日に及んでゐる次第であります。私は常に奈倉先生と言へば生氣、生氣と言へば奈倉先生を直ちにお偲びする位、先生は、私どもの健康を御心配下さつて、御多忙な時間を生氣の爲めには割愛して下さい

て、あらゆる艱苦と犠牲とを拂つて生氣の光明へと御導き下さつた事は、私どもの衷心より感謝してゐるところであります。そして生氣による健康の向上は、私をして高商三年の生活を活氣あらしめ有意義ならしめた原動力となつたと申しても過言ではありません。そして、それが、我が貝島生氣團への導火線となつて、幾萬の人々が、現に蒙つてゐる御恩恵は、實に廣大無邊のものがあります。斯くの如き大人格者の先生を、部長に戴く我愛する山口高商生氣クラブの前途は今や洋々たるものがあり又私の最愛なる母校へのおき土産としての此部が弓道部と手に手を取つて、すこやかに成長し行く様を見て、私は、なつかしの山口の山河に別れるに當つても、獨りにこやかなるほゝ笑みを以て、去り行く事が出来るのであります。そして、先生の最後の私どもへのアドバイスたる『何とでも言へ、大石

内藏之助』の一句は、永遠に私の指針となる事でありませう。

斯く三帥の恩の甚大なるを感じ來れば、今や社會への第一歩を踏み出さんとする私として、何でうか／＼して居られませう。自己の最善を盡して此師恩の萬が一にも報い奉らんものと自らを鞭つ次第であります。

箱崎での思ひ出

話は、十四五年前にさかのぼる。

其頃の私としては、夏休み程待ち遠しく思はれたものはなかつた。私だけでもあるまい、誰でもでせうが、子供時代は、その日常の單調さ、平凡さに厭き／＼して居るものですから、今から思ふと何でもない事、一寸した事柄や、出來事を一大事出來！ とばかりに矢

鱈に騒ぎ立てたものでした。

その謂は、好奇心の結晶みたいな私共へ、夏！ 休暇！ 旅行！ 海へ！ 山へ！ と、それは、あまりにも大きな變化です。あまりにも大きい魅惑です。これが喜悅でなくて何でせう。

私は、その楽しい休暇をほとんど毎年と云つていゝ位、箱崎の濱で暮すのでした。

そして如何にそこへ行く事が待ち遠しく思へたかは、次の一事を以ても解るのです。

それは、出發の一ヶ月も前から、旅行の用意で、それは／＼大へんでした。何しろ一ヶ月も前から、トランクの中へお菓子まで入れておくものですから、愈々出發となるまでには、トランクは幾度となく詰めかへねばなりませんでした。そして其詰めかへは、第三者

には、いかにも子供らしい無駄事で御苦勞千萬の事の様に見わたでせうが、當の本人なかく御苦勞どころか、微だらけのお菓子新しいのに入れかへたり、ノートを別の表紙のものに入れかへて見たりトランクの中のそれらの自分の生命から二番目に大切と思つてゐるくだらぬ、ごたくしたものを並べかへたり、積みかへたりする事が、無上の樂みでそうする間にも箱崎の幻が目にもちら／＼するのでした。

それ位待ちに待つた休暇ですから、箱崎での印象は、それが又一年や二年でなく、ずつと續けて四五年も同じ海で遊んだものですか、今も尙其當時の思出は、深く／＼私の腦裡に刻み込まれて、年と共に一層その樂しかりし幼き日の幻影は、兎もすれば、薄れ行く過ぎにし方の記憶の中に、くつきりと浮び出して、いつしか現在の

自己は消ね失せて、其處にまざ／＼と當時の姿に立ちかへる様にさへ思へてならないのです。

箱崎でのそうした思出の數々は、私への印象の程度も同等な強さのものが走馬燈の様にそれからそれと連続的に出て來るので、その中のどれを言つてよいか躊躇しますが、毎年あの水族館の附近へ家を借りてゐたものですから畢竟そうした思出も水族館を中心としたものが多いので、それを二三申す事にします。

御承知の通り、箱崎の水族館は、水族館と云ふより、動物園と言ひたい位、魚類よりも他の或は、鳥類だとか、獸類と云つたものの方が多數ゐるのです。そして、何處の動物園でも同じ様にお客を一番面白がらせる愛嬌者は、何と云つても、あの猿君です。

水族館でもやはりあの面構で、私共を常に喜ばせてゐました。

菓子の中に胡椒を入れて投げてやると、やつ、鼻をビクつかせて居ますが、手で、それを割つて、内容物をすつかり摘み出してから“へん、どんなもんだい?”と云つた様に、白い流し目で、私共を見やりながら旨そうにバクつくのを見せつけられると、猿に私共萬物の長が馬鹿にされた事を痛感します。

そこで、此度は、鏡をやると實に滑稽な事をやるのです。それを取り上げて、最初は、自分の顔を不思議そうに頸をかしげて凝視してゐますが、てつきり、奴さん友達が居るんだと思ひ込んで、怖い表情をして見せる。そうすると相手も顔中口にして“ブーツ”とやる。そこで此方が益々猛烈になる。と相手もそれに比例的に擻猛な表現をやる。さあそこで大へんだ。手が出る、白い歯が出る……………コッーと鏡にいやといふ程自分の顔をぶつ、つける。それを何度も

やる中に、どうやらいつもの勝手とは違ふと見て取つて、急に正面攻撃を中止して、作戦をかへてかゝる。……………そーつと、鏡の後方に手を回してから、思ひ切り相手を否虚空を掴む。掴みさま、怖い顔で、“カーツ”とやつて見せる。それが一度や二度でない。何度もくく繰り返して居る内に辛抱しきれなくなつて、いらくくして来る。とその手のスピードが段々速度を増加して来る。その中にとうとう腹立ちまぎれに鏡を両手で差上げて、岩の所へ行つて、ゴシくくと岩で鏡を研ぎ始める。鏡が破れる。手から血が出る。それを見て“キヤーツ”と一聲、金網の天邊へ一目散に走り上る。そして未だ、下を向いて、キャツ／＼と白い齒をむき出してゐる。といふ次第で、一段落つく。それを見て私共は拍手喝采する。さつきの恨を晴した氣持ちで。

こんな風に、金網の中での猿君は實にユーモリストとして、私どもから玩具にされるのでしたが、適々檻から出ようものなら、それこそ一度に解放状態になつて、その本性を表して、そのいたづらと云つたら實に手がつけられない。

お客さんの頭へ登り上るまではいゝが、人間を友達と心得て、蚤取りを始めるのには少々閉口してしまう。

或は、家の中に大びらに這入つて来て、手あたり次第物を投げける噛む、いやもう大へんな騒動になる。それを棒切れなどで追ひ拂ふと尙意地になつて、いたづらを始める。實にもてあましたものだ。

こんな事もあつた。或時、これ見よがしに正装した一婦人の頭髪に手が懸つたかと思ふ間にすつかり中味を引き出してしまつたので、其婦人は見物もそこそこ火の様に赤くなつて歸つてしまつた事もあつた。

つた。

又或時、宮本文ちゃんが南洋産の最も犇猛な黒猿と角力を取つて顔中ひつ搔かれて、泣きながら上になり下になりしてゐる處を宮本のおいさんが猛烈に怒つて、猿をベチャンコになる位地面へ叩きつけた事があつた。

が免も角、奴さんたちは、私の親友だつた事は、否定しない。

猿の事はその位にして、次は、評判もの、熊のお話をする事にする。此熊は聞けば今年老衰で可愛そうに死んださうだが、あの頃は、まだ元氣旺盛な時代で、よく宮本さんの號令でお一二、お一二とよちくししながら後脚で立つて歩む様は今でも目にもちらついてゐる。そしてその御褒美が面白い、あの大きなす、體に小さなお芋一片とは、なさけない。しかし御本人は、いかにも満足そうに小さい目を尙小

さくしてむしやりくどやつてゐる様は、實に無邪氣なものだ。

それだけではない、まだ、たんと藝を知つてゐる。その一つに、四つ脚で、大きな棍棒をくるくると回したり、手拭で姉さんかむりをしたり、アーンと大きな口の中にお芋を投げてもらつたり、實にあの巨大な身をよくあゝまで、こなせるものだど感心させられる。先生の一番好物は、玉子である。一週間に一度位、玉子をやると、頗る御満足の體で、たしなみく少しづつ食つて否嘗めて行く。そしてきれいに殻までペロリとやつて、まだほしいなと云つた様な顔をして、舌なめすりして御座る。その様子はとても狡猾な猿などには見られない、可愛いものです。

鳥類の方では、あまり遊び友達になる様なものは居なかつたが、一羽の大鷲がゐて、之の餌に空氣銃で、小鳥小舎の蔭から、その小

鳥の餌の米や粟などを啄みに來る雀を狙撃ねらいうちにして、日に二十羽位は捕つては、それを此大鷲に献上するのが非常に面白かつた。鷲は、熊や、猿の様に表情こそ出來ないが、投げるとすぐ雀を一方の足で押へて、あの黄色なデカイ鋭い嘴で、羽をきれいに抜き取つてから、御馳走様とばかりに、簡単に一口で片付けて、目をクルリツとやつて、澄したものだ。

又鶴に鱈をやつて、あの長い首で水の中を鱈を追ひまはす所など大へん興味のあるものだ。それから無数の名も知らぬ美しい色様々の小鳥が、朝の日を身體一ばいに浴びながらチツチツとさも嬉しうに囀つてゐる様は、恰もパラダイスの様だつた。そうく鳥や獸の事ばかり言つて肝心な魚の事は、すつかり忘れてゐました。

水族館と名の付てゐる以上、魚も居ないではない。時には實に奇妙

な奴やとても美しいのが来るが、どうも永く生きてゐない。惜しい事だ。やはり大海から急にその設備がいくら完全でも不自然な人工的なあの水槽の中ちや—たまるまい。それに水槽の中では、水が濁るので餌をあまりやらない。従つて其處には、所謂弱肉強食の修羅場が展開される。——大きな鯛の目が潰されてゐたり、蝸入道の奴が、無慈悲にも小さな美しい魚を食つてゐる處は、面白いといふより一種悲痛な感さへするので、蝸の奴を思はず棒の先などで啄いてから、そこにガラスのあつた事を始めて知つて、苦笑した事もあつた。

けれど、青に赤に黄に、色とりどりの意匠を凝した魚が、緑の房々した海藻の間を何百となく群をなして縫ひ行く様は何百尋の海産も斯くやと覺ゆる位、美麗な一幅の繪巻物に他ならない。岩穴の中

を見ると、そこには、鮫鱈 (The angler) が、あの巨大な口をアングリとはつて、入らば一口に……とばかり、りきんでゐる様は、如何に最眞目にみたつて、あまりぞつとしない爲禮だ。そうかと思ふと、飛の魚の姿のいい奴、縞鯛のきれいな奴が、見てくれと云はぬばかりに、氣どつて泳ぐ。目を砂上に轉すれば此處には又、無心にせつせと登つては落ち、落ちては登りしてゐる辛抱者の宿借りが滑稽だ、……といふ具合に、水槽の中の景色は、その頃の私には、活動寫眞以上の興味を以て、毎日／＼魚の行動に見入つてゐるのでした。が終に大へんな事を考へ出したのです。といふのは、こうして毎日、見てゐる魚は、いくら美しくてもガラス越しです。そこで、次には子供のそれが好奇心で、一つ水槽の中の魚を捕へて鹽にでも入れて見たら、尙面白いだらう。そしてそれに餌などやつたら魚も、さぞ

喜ぶたらう……といふ様なとんでもない事を考へて、或日、宮本さんに無理に願つて、水槽の中から網で掬ひ出してもらつた事もありました。が其結果が、よからう筈がありません。それにこり／＼してもう二度とそんな非常識なまねはしなくなりました。

又水族館には、大きなプールの様な生洲 (a fish-pond) がありました。が、それを、水族館の人達は、『坊ちやんの御獵場』と言つてゐました。何故かと言ふと、私だけ、その魚を釣る事を許されてゐたからです。許されたのではない、無理矢理許してもらつたのですが、そこで時々小魚を釣つて居ましたが、或時、大きな鮫 (The shark) の奴が食ひ付いて、危く小さな私の方が引きずり込まれる所を宮本さんに協力してもらつて、やつと釣り上げた事がありました。そして釣り上げたものゝ二人で閉口してしまつた事を記憶してゐます。

まあ、そんな風で、朝起きるが早いか、水族館へ、そして、夕方暗くなるまで、そこで實に愉快に暮すのでした。今から思ふと、宮本さんを始め、水族館の皆さんには、どれだけ御世話になり又御心配や御面倒をかけた事か解りません。厚く感謝してゐます。

又私はよくいたづらに『落し穴』を作つては、水族館の人や、附添の人を落して、喜んでゐました。箱崎といふ所は、砂地で従つて子供にも安々と大きな穴が、短時間に作れるのです。それで、毎日の様に或は長い、浅い、細くて長い、太くて短い、色々な様には／＼色々な式のものを、終には、井戸の様な、下に水か溜る様な大仕掛なものまで作りました。穴が完成するとその上に木片を井の字形に置いて、その上に蓆の切れを置いて、その上へ薄くばらりと砂を散らすのです。そしてその上を、そつと箒で掃いておくのです。

それからその『落し穴』の場所が問題です。よく人の通りさうな所を選定して、そこに人が氣付かぬ間に手早く作つて、知らぬふりして蔭から見えてゐて、落ちれば、やんやと喝采するといふのです。或時など、砂糖屋のおばさんまで落ちて、もう貝島さんには行かぬ、と言つて怒つたさうです。

又或時は、皆ど『兵隊ごっこ』をして遊びましたが、其時ちやうど雨あがりで水量が増して、池と道路との見分けがつかぬ時でした。お一二、お一二と私が大将で、大きなおやし、舛谷君小山田君久保田君たちやらば、一や達までが歩調をとつて歩いてゐました。ところが先頭の小山田さんが『あッ』と言ふ間に池の中へ落ちて、びしよ濡れになつたので、戦争ごっこも大なしになつた事もありました。夜は、早く就寝する習慣がありました。が時たま、三宅（此人のことを

三宅のトントンシャンといつてゐた）といふぢ、一やが博多二〇加が上手だつたので、夜晩くまで二〇加を夢中になつて見てゐました。三宅さんは、實に二〇加の天才で、即席に何事によらず二〇加に作りかへて私たちを喜ばせてくれました。私が今に二〇加の口調を記憶してゐるのは、其の爲めです。又、宮本さんは、話や唄をよくやりました。

舟唄が、おいさんの十八番で、私は文句など解らう筈がありませんでしたが、聲はいいなと子供心にも思ふ位きれいな聲で、目を細くして唄ひました。も一度聴きたいものです。

それに話が好きで、色々の話を聴きました。その中で今も尙、不思議に思つてゐるのは、海の怪物のお話です。それは、先づこんな話でした。

話は、あの志賀の島の近くでの事です。箱崎の漁夫が鯛とりに行つての帰りさ、島へ上つて一休みしながら、とつた鯛を火で焼いて食つてたさうです。その時に、どこともなく一人の老婆が来て、鯛を一つくれ、と云つたさうです。しかし、漁夫達は笑つてやらなかつたのです。ところが見る／＼内に婆さんの顔がもの凄くなつて来て今にも飛びつきさうな勢を示したので、皆は、我れ先きにと舟にとび乗つて、あの一丈幾尺の櫓を操り始めたど、途端にその婆否怪物は一つの櫓に噛みついて、ポツキリとあの大きな奴を見事に折つてしまつたので、一同青くなつて夢中で舟を飛して箱崎へ這々の體で歸つたとか。今も尙、その時に齒形のついた櫓が、志賀島神社にあるそうです。そして宮本さんのお父さんもその時の漁夫の一人だつたので宮本さんは、その話を父さんから聞いたのださうです。

不思議なお話ですね。話のコンストラクションは以上の様なものですが、それに宮本さん獨特の綾をつけて面白く話すので、何度も繰り返して、聞いたのでした。

時々、福岡博多方面へも行つた事もありましたがその箱崎と違つて、めまぐるしい活動の巷は、子供への刺戟としては強烈過ぎたと思へてあまり思出としてはない様です。やはり、箱崎の特に水族館を中心としての思出が一番私の心に、しつくりとその空氣が合つてゐたせいか、今は年と共になつかしく、思へてなりません。

そして永遠に幼かりし日の楽しき思ひ出は、私の脳裡から去り行く事は、決してあるまい。

あゝなつかしの箱崎の空よ！

初飛行の思ひ出

東京福岡間のフォッカーので、つかいやつが頭の上をブン／＼やるのを見ると、乗りたいな——で一ぱいになる。まあその中に乗る事にして、少し僕が始めて飛行機に乗った時の気持ちを書いて見やう。

高商に入つた年の夏休みは香椎ですごした。その夏休みになつたばかりの頃幸か不幸か誰やらから西公園の下の飛行場で遊覧飛行をするさうだといふ事を聞いて、それが飛行機熱の高かつた頃の事だつたからたまらない。むらく／＼と好奇心と年來の欲望が一度に燃えさかつてどう／＼乗る事に決心した。決心したら善(?)は急げですぐさま西公園下の日本航空輸送株式會社福岡飛行場へとかけつけた

けれどその日は天候の具合で残念ながらす／＼と引き返したのだつた。

しかしあゝ遂に望みの遂げられる日は来た!

八月七日、絶好の飛行日和、午前九時頃飛行場着、先づ飛行名簿へ記名、支配人から受け取つた飛行帽をものめづらしさうにひねくつてゐる中に、格納庫の方では僕の乗る Osht. 式に十人位の所員がかゝつて盛んに機體の點檢をやつてゐる。どその操縦をしてくれるといふ宮さん(一等飛行士)がやつて来てビョコンと頭を下げ、簡単に挨拶をしてのける。それが返つて飛行家らしい親しみを與へる。なか／＼點檢に念を入れると見わた、容易に御用意が出来ましたと言つて來さうもない。そこで宮さん達とぞろ／＼格納庫の中へ行く。格納庫は相等大きなもので、川西の八型や此度新に出來たとい

ふ Monoplane のすごい奴の中に僕の乗る Osho が小さくなつてゐるのは何となく心細い。出来る事なら川西の八型の方でもと思つたが郵便飛行に使用中とかで、それに初心者には速力が早すぎるとかいふ少々人を馬鹿にした様な理由のもとに、きつぱりと断られてしまつて、やつぱり遊覧にはゆる／＼飛んだ方が見物が出来ていい、などと勝手なけれど苦しい理窟をつけて腹の虫を殺して何くはぬ顔をして見た。

機體は近くに行つて見て始めて中古らしいのに氣がついた。しかしもう一臺の Osho よりはるかによささうに思へたのでやつと爆發しさうな不満を噛み殺す事が出来た。聽て検査もすんでエッサ／＼で格納庫から引き出して、クレーンで海へ下した。それへ宮さんが氣輕に乗る。スイッチを入れたがなか／＼エンジンがかゝらない。何

度も何度もスイッチを入れては切り入れては切りしてゐたけれどもどうもプロペラが廻り出さない。宮さんは「くそ！」と一言飛行機から飛び出してしまつて『こんなぼろは焼いつちまへ！』とぶつぶつする。そこへ所員が五六人かけつけて約三十分位手入れをして見たが更にその甲斐がない。そこで仕方なしにも一つの例のこれよりガタ／＼の方を點検もそこ／＼引きずり出して、無造作に宮さんがスイッチを入れたら、ブーンと心地よくプロペラが廻轉し始めた。

その時には思はず萬歳を呼んだ。

そこで飛行帽をつけてもらつて、どこから乗つたものかとプロペラのひどい風に吹かれながらうろ／＼して、やつとの思ひで飛行機へ這ひ上つた。そしてバンドを締めてやつと落ち付いた氣持ちになつたので舂谷さんのカメラの方に向いてにやりとやつて見せた。そ

の單に、やりだが、實際あの時のやりは複雑極まる心の表現だつたのだ。

やがて『さよなら』を後にする／＼と機は滑り出して、いつか堤防の外の滑走に都合のよい所にまで来てゐた。それから機首を玄界島の方に向けたかと思ふと急に一段とプロペラが唸り出し、顔にあたる風はまるで刺す様で、波の飛沫は機の尾翼さへ見えないまでに飛び散る。

フール、スピードだ！ 全馬力での突進だ！

實際その波の上の滑走の心地よさと來たら例へんにものなした。

全く何が男性的だと言つても水上機の水上滑走、しかも將に離水せんとする刹那の機上の氣持ち程血湧き肉踊る男性的快味をしみじみと味はされるものは先づあるまい。實に今から思つても身體がす

ん／＼する。……と次の瞬間には身は將に地上の人ならず無窮の空間へと乗り出してゐるのである。ひよいと下を見ると今までのすぐ眼下に踊つてゐた金波銀波はいつか盟の水を見る様に次第に皺が小さくなつて行く。大分上つたなと思ふ中に機はいつしか西公園の眞上にかゝつてゐる。青い青い波のカーペットの中にくつきりと浮び出た西公園。……まるで繪だ。うつとりしてゐる間に機首は目的地たる香椎の方向へと轉換。直線的飛行だ。と途端にすーつと二三十米も機ごとたゞ下された様に感じた。慌て、下を見ると今機は那珂川の上空を飛行中だと知つた。その時は何の事やら五里霧中だつたが、後で聞いて見たら大きな河の上や、海岸線、山の近くと云つた所は氣流の関係で或は叩き下されたり、左右にひどく揺れたり、何かしら動揺を感じるものださうだ。僕等は平常地上では氣流なんどの觀

念は更にないものだが、一度空の人となると痛切に氣流といふ事を意識させられる。

やつと機にも少し馴れて来たので用意してゐたカメラを取り出して先づ福岡市の上空からパチリと一枚。それもなか／＼地上で寫すのとは譯が違ふ。何しろひどい震動と風あたりだから寫眞機の蛇腹が破れやしないかと心配するまでパタ／＼やる。シャツターを切る手は電氣按摩にでもかゝつた様に振つてゐる。これちや／＼満足な結果が得られよう筈がないと思つたが、まあものは試すと飛行中に三四枚撮つて見た。

早いものだ、さうかうして居る間に香椎の上空へと來てゐる。西公園から香椎までたゞの三分！ 半身を機から乗り出して別荘をさがす。やつと見當がついた。そこで大聲で宮さんに『ここで三回轉！』

とそれこそ一生一代の聲をはり上げて呼ぶ。宮さんは合點をして見せる。廻る／＼。ここだとはかり隠し持つたる無数のピラを自動車からでも撒くような手つきで少しづつ撒き散した。そしてヒラ／＼下る美しさを見んものと下を見たが更に影も形もない！ どうした事かとひよいと機體を見ると撒いた紙片は皆びたりと機體と云はず尾翼と云はず張線にまでくつ／＼いてしまつて離れやうともしない。これは大失敗とおろ／＼してゐると、宮さんが苦い顔して手早く僕の手から袋ごと取り上げて、それを新聞紙へくる／＼とくるんで、そのまゝ下へほうり投げてしまつた。随分無茶だと思ひつゝも下を見ると、す／＼と或距離まで落下して、ぱつと開いた。開くと同時にハラ／＼と赤白黄様々の紙片が亂舞する様は、實に美しいものだった。そこでこれも地上とは勝手が違ふ事を知らされた。

もつとく、廻りたかつたが、そのまゝ歸途についた。福岡市を一回大きく旋回して、百道海水浴場では思ひ切り低く飛んで、ほとんど人の頭をすれ／＼に走る。實に壯快そのものだ。と次の瞬間には空中滑走だ。これ位氣持ちのよいものはない。と、ごすん……とシヨックを感じた。海に着水してゐたのだ。それからブル／＼と格納庫の近くまで水上滑走。何の事はない舟の早い様なものさ。

嬉しさうな舛谷さん達の顔が見える。梯子がかゝつてやつと機から離れて地上へつゝ立つた。耳が／＼するのだけは不愉快だ。そこらの人が澤山走つて来て、どんな氣持ちだつたかとか怖くはなかつたかとか色々質問されて閉口した。先づこれで初飛行は終つた。そして多年の宿望を達する事も出来たし、初飛行にしては一寸人のやらない寫真やビラ撒きまでして僕としては充分飛行機の快味を味

ふ事が出来て満足だつた。そして地上では體驗し得ない空間の種々の現象を知つた。又空へ上つてしまへば、一切の世俗から離脱した様な氣分になつて、確かに「これ／＼人間ども何を醒醒してゐるのだ？」と呼びかけたくなる。僕等の様な凡俗はたまにはこいつに乗つて塵の下界を見下して見る事も必要である。

宮さん達に別れを告げたのは、それから半時間位後の事であつた。「又何時でも」と宮さんがにつこりとする。「有難う又御願ひします。」と自動車のドアを開けながら言つた。そして自動車ののこい事を今更ながら感じながら歸途についたのだつた。

あゝされど宮一等飛行士今はなし、そゝろありし日を偲びて淋しさが身に入みる。

何處かで飛行機の高らかなる爆音がリヅミカルに流れる。(昭和四年夏)

思ひ出の山口

誰か言つた『山口は、京都そつくりですね』と。

成程、山にづつと囲まれた所から、川が、碁盤の目の様にきちんとしてゐる町を帯の様に流れて居る様、……それに氣候までが何だか似てゐる様に思へる。けれど何と言つても私達に最も強く似てゐるなどいふ感じを味はせるのは、紫に煙つて眠つてゐる様な山口全體の静けさである。落ちつきである。のびくとした空氣である。

岡本一平が、山口に遊んだ時に『山口には、煙突が三本ある』と言つたが、實際山口の町は、龜山から眺めると、町が木の間からやつと見へる位のもので、町に街路樹を植へたとは、どうしても思はれない。それ位だから、縣廳はあつても、決してそれが生産都市従

つて、工場の黒煙漠々たる煙突が見えよう筈がない。世の所謂唯物論者は言ふであらう『山口には一體、産物はあるのですか？なに？ない？それでゐてよく縣廳の所在地と言へますね。それに電車もなく、全く此活氣の無いのにはいやになつちまう』と。何とでも言へ！君みたいな物質論者に答辯するだけ野暮だからね、人が何と言はうと私達は、その生産都市ならざる所が、否その物質的生產都市ならざる所が私達にひし／＼と親しさを感じさせる所以である。お説の通り、山口は、物産とては何にもない。甚だお恥しい次第である。然し山口の環境は、無言の裡に人を作りますからね。

人物の無形的生産！これこそ我が山口の最大にして且つ他の追従を許さぬ産物でなくて何であらう。その點で、山口は學生町だと言つても過言でない。試みに山口の町を見給へ。町を歩いてゐる人

の大部分が、學生である。それも幼稚園の小つちやいのから、髷だらけの學生に至るまで、それはく賑かなものである。鬢聲をはり上げて夜の町をねり歩く山高の生徒、白い袴に棍棒片手の颯々たる姿の高商剣道部、或は店を冷かしに歩く無邪氣なやつからカフェーの赤い火を追ふ不良の徒まで、そしてその男學生の間を小さくなりつゝ、けれども小蝶の様な氣輕さのスカート姿が縫つて行く、それかと思へば、町一ぱいになつて『お手々つないで……』可愛いおかつぱさんが元氣だ。そんな風だから山口の店といふ店が學生相手だ。學生を對象としての町であり、學生なしでは一日も立ち行かぬ町である。だから小さな子供まで『學生さんく』と言つてなつく。可愛いものだ。いつだつたか、不意に『學生さん、幼稚園へつれてつとやられて閉口した事があつた。』

従つて、學校の催ものがなかく多い。やれ音樂會の、やれ展覽會の、やれ競技會のやれバザーのと年中どこかの學校がやつてゐる。けれど、我田引水ぢやないが公平なところ、高商のそうした催が最も人氣があつた。高商主催と書いてあると何事によらず騒がれたものだつた。春秋二季の大音樂會の夜の、心よいリズムの流れは、聽衆を恍惚たらしめ、全國大學専門學校辯論大會の日は、私ども若者の血は躍如たるものがあつた。その他外國語大會に、廣告及び寫眞展に、各種スポーツの大會に、山口の天地は湧きかへつた。その吸引的環境にありながら尙飽足らず他の學校のものへも何かと言へば友達六人で行つたものだつた。とくに女學校のバザーには、校門の前で足ふみしながらも友達の勢で無我夢中で飛び込んでしまつて、赤くなりながら菓子など夢中でつまみながら、平常高商での大びら

ふりはどこへやら、おろくものでこそくと引き上げてから、お互に顔見合せてクスリ……と苦笑した事もあつた。

學生町だから活動寫眞はよく来る。但し無料ならば満員、十錢でも取られるとちらほらとは誰か口の悪いやつが言つたとか、何にしても山口では學生様々で學校の休暇中の町の淋しさと來たら實際ひっそりかんとしたものでローマの廢墟を思はせる感がある。そして山口では兎に角最高學府だつた高商の學生だつた私達は、リード的のそこに責任もあつたが、概してその學生生活の印象はコンフオタブルなものであつた。

私共學生は、日曜には必ず郊外の散歩へと出かけた。山口では「Hoben」や「Könömine」は幾度となく登つた。梅の二月堂、龜山、香山園の躑躅、「Hinkel」の瀧、傳説の姫山の麓なる出合河のボートは夏休

み前の私どもを如何に喜ばした事か。

御堀方面への散策にはよく例の有名な外郎に舌鼓を打ちつゝ、澁茶を啜る時は如何なる山海の珍味よりもおいしく感じた。

外郎で思ひ出したが山口には外郎の他に、タヌキの密豆も學生仲間には珍重される。友達をおこる時も大抵は、此蜜豆と相場が定つてゐるが、時には一寸洒落てふじ屋のケーキ、も少し氣ばつて、山口一にして且つ唯一なるミドリ食堂の洋食。しかし近頃八木食堂が大分八木ランチで評判がよくなつた。ヤマブキのうどんも食つて見たが、うどんはやはり高商の五錢のうどんの方がいい。カフェーもなか／＼あるが、私は不幸にして學生中には足をほとんど入れなかつたから云々するだけの資格がない。學生の間は食ふ方にかけては、一様に抜け目がないと見へて山口中の食物の事なら何でも知つてゐ

る連中ばかりだ。

山口も市になつた。市にはなつたが、圖書館のドエライやつが出来て税金が高くなつた位のもので、以前として例の電車ならぬ無軌道電車がブーブーと眞白な煙を立てて這つて居る。そして山口デーにはやはりハンタ娘がこれ見よがしに出る位のものである。

しかし春の櫻に、初夏の「Wanishi」の螢に、秋の蕈に、冬の水の上の五重の塔の雪に、ながめつきせぬ風情は、苟も此地で學生生活を一寸でもした者なら誰しも、終生忘れ難い思ひ出として残る事であらう。

今正になつかしの山口の地を後に遠き空に去り行かんとする私は、萬感胸に迫つて言ふ所を知らない。

さらば、我が愛する山口の山河よ！ いつまでもくすこやかに今

の姿で居てくれ！ あゝさらば！

(昭和四年八月箱根にて)

高 商 生 活

中學を出てる頃考へたよ。ごこの學校にしたものかどね、そして元來僕は、機械ことに飛ぶ奴がとても好きでね、だからさ、こいつに乗つかつて、或意味に於て、死線を越へた人間といふ事は、知る人ぞ知るである。

そんな具合だから實は、高商なんごとは、思ひもよらなんだ。ところが、どうした風の吹き廻しか、するくつと滑り込んでしまつて、毎日、やれ法律の、やれ經濟の、やれ商品のとまるで中學時代には、御目にかゝつた事もない様な學科だらけで、おまけに、それが、例の肩のはるノートと來てるから、たまらない。それに、蚯蚓

みたいな横文字と睨めつくらをする時間が、無慮毎週十三時間餘。

始めての異人さんの先生の時間が面白い。最初から、『ミスター貝島』とやられて、ドキン！として、只おろ／＼するばかり。

“What is your name?”で“My name is K. Kajima.”までは上出来だったが、その次の問らしいベラ／＼からは、まるつ切り聞き取れず、蚊の鳴く様な振ひ聲で、“please once more.”の連發。異人さんに、にや／＼されて、よけい上つて赤くなるばかり。それが僕一人かと思つたら、皆んな、斯うなんだ。

おかしなものだ、これが、つい此間まで、中學では、最上級生としてお互に、相等ならした連中かと思へば、實際不思議な位だ。徽章が新しくなると斯うまでいくちなくなるかと思ふと自分ながら何だかへんだ。へんだがしかたがない。

皆んな名を指されや／＼しないかとはらく／＼して居る様は、やつぱり、争はれぬものだ、高商は高商でも、出来立のはやく／＼さんだからな。

そして高商といふ所は、まるで、學科の Wholesale store だ。あらゆる商賣人向きの學科に加ふるに、職業婦人のしさうな、タイブライターまで御教授下さるのは、有難いとも何とも言ひ様がない位参つたものだ。それが、最初から、異人の女の人が、黄色い聲で、べラ／＼説明するんだらう。解る奴が居よう筈がない。ほかんとしてゐると、『おい君！ 今言つたのは、ありや／＼何んて事だい？』と來る。問はれた御當人が、いや、實は、僕も君に御尋ねしやうと思つてゐた處なんですがね……。では、全く始末が悪い。そして此女の人、とてもやかましい人で、目は、常に正面の紙を見ての五本の

指を皆使へるとなか／＼注文が六ヶ敷い。隙を狙つては、ちよい／＼キーを見る一本の指でコツ／＼打つて見る……そこを折悪しく見付けられ様ものなら、それこそ“*You are a bad boy!*”とか何とか言ひながら、自分の持つてる本で、目がくしをしてしまふ。仕方がないから、赤くなつて、嘘ばかり打つて、冷汗をかかといふ始末。

確か入學してから一週間も経つた頃。

今泉先生から僕等は、ひどく驚かされた。

それは、英専の時間に、

『おい、一年ぼうず！ お前たちは、一體どこの女學校から來た？』と第一發から浦公式だ。

次に、

『日に十頁づつ進んで、ごし／＼落第させるから、英専部へはひるな

らば、今夜一晩考へて、明日、血判を押して申込め！』と言つて、紙片を一枚宛渡して、さつさと歸つてしまつた。

さあ僕等の心配つたら一通りでない。いや大へんな所に飛び込んだものだ。あの小さな字の本（それは *The Country of the blind.* といふ本だつた。）を一日に十頁もやられてたまるものか、それに、血判の何んので、その頃はまだほんとお坊ちやんだつた僕等は、實に本氣に考へたものだつた。しかし上級生に、それが所謂浦公式で言ふ奴だといふ事を聞いて安心したものだつた。

それに學校にも、山口にも馴れないし、つく／＼高商などには、中學からはひるものぢやない。と痛感したよ。何故つて、商業から來たものは、まるで一年間は、おさらへみたいなものだし、それに、僕の中學時代に得意だつた學科は、ちよつびりも無くて、皆不

得手な虫の好かぬ學科ばかりで、實際、しばらくは、腹が立つたり、くやしかつたり、三年が辛抱出来るかなどと思つたりした。けれども、ものは考へ様である。

斯うした不得手な學科ばかりだから中學からはひつたものは、皆勉強する。勉強するから始めに難解なものも次第に解つて来る。解り口が立つと、自ら興味といふものが湧て来る。興味は進歩を生むといふ具合になる。

實は、自分の好きな道といふものは、或程度までは、ほつて置いても延びるもので、少しの隙を見ても、さうした方面の研究は、自分で何かしらやつてゐるものである。 *Most of us manage somehow to find time for the things we love.* だから無理に學校で詰め込んでもらはなくとも結構自分で自學自習が出来る。つまり、僕に言はしむれば、

學校では、自分の不得手な方面を延ばしてもらひ、自分の得意な方面は、自分で自然に延んでゐるものだから學校などで延す必要がない。そこで、無論深くはあるまいが、常識の廣い人間が出来る事になる。

僕は思ふ。高商なんて言ふ所は、勉強して何も學者になる所ではあるまい。即ち生きた學問、人間としての廣い智識を吸収して置いて、實際問題に直面して幾何なる難問をもその得た廣い常識的智識を以て解決して行ける様に出來るだけ智識を廣く求めておく事が肝要だと思ふ。成程、『好きこそ物の上手なれ』で、ほんとに天才は、自分の得手をどん／＼延して行く事もよからう。しかし僕等みたいな凡俗は、自分の好きな方面を延ばして見ても先が見えてゐる。そこで、まあ、人間として常識的な人間らしい人間になりたいから、

僕などが、高商にはひた事も、後で考へて見ると策の得たるものだつたかも知れない。

てな理窟を勝手につけて自分を慰めてヨック／＼やつたものだつた。それが、二ヶ月たち三ヶ月たつ間に學校内部の事情も、山口の環境にも馴れて来て、その空氣に次第に同化されて来て今までの苦痛や悲觀は、どこへやら、一路の光明を認める様になつて来た。

それに學生の鬼門たる試験も一年に二度と來てるから、その間は、實に天下太平である。けれども、一年に唯の一度の試験だから、試験の時は、分量澤山で、實に盆と正月が一度に來た様だつた。何しろ、商品なんかと來ると、プリントだけでも片手に持つて勉強してゐると忽ちにして手が痺れる程で、それに、フリースレクチュアリーのノートまでと來てゐるから實際手のつけ様がない。

それから平常教室では、話の面白さに夢中になつて聞いて居る間に、いつか百頁にもなつてゐる浦公の英語。そして試験場で「先生！ここん所が滑りて解りませんが」とプリントの不鮮明な箇所を問ふと、先生すましたもので「解らん様に書いてあるんだ。どうせお前等に解つてたまるもんか、のんた……。」で一本參る。そして答案の分配方法が面白い。まるで廣告のビラでも撒布する様に教室の中がまるで蜂の巣を咬いた様な騒ぎの事もあつたが、兎に角高商の浦さんと言へば、山口の學生なら「あゝあの先生か」とすぐ合點する位有名なものである。といふのは、先生英語ののんた譯のうまいものささりながら、あれで音楽とかに通じて居られるらしく、我校の押しも押されぬ音楽部々長様で、春秋二回の大音樂會の時には、いつもならぬ折襟に金縁の眼鏡といふ、すばらしい扮装で、滿堂の紳士、

淑女諸君の腹の皮をよらすユモア―振りを發揮されるので、その名聲は赫々たるものがある。けれど先生は、平常は、或時巡査から「お前は高商の小使か？ あーん」と言はれたほど詰襟に草履といふ誠

に以て御質素なところ、常に僕等に親みを起させる方だった。

「さあ遠慮しないで、ごしくおやんなさい。」と、おやんなさいに妙にアクセントをつけて、先生獨特の本場の異人さん跣足の流暢な發言を以て、ぐんぐ進む齋藤先生。何と言つても決して『まける』といふ事をしないのが特徴。けれど、あのしんみりした親しみ深い調子の教室での教授振りは、今以て目前に彷彿たるものがある。ほんとに圓滿な人格の所有者であられた。――それで先生のいつぞやの御大病の時の僕等の心痛つたらなかつた。しかし幸ひ今では、より以上の御健康體になられた事を衷心より喜んでゐる。

「デカルトは、方法の問題は……。」と最初のノートから僕等をすつかり面食はせてしまつた經濟の向井先生のノートばかりは、どうも日本離れがしてゐて、『讀書百邊、意自ら通ず』といふ古言の唯一の例外をなすもので、讀めば讀む程迷宮にはひつてしまうかの感がついて閉口したものだつた。何しろ先生は、大の讀書家で、毎日學校からお宅へお宅から學校へと、大きな風呂敷にデカイ本をぎつしりつめ込んで運搬なさるところを僕等は何度となく見た。それで先生のノートは實に微に入り細に入ったもので、『慾望』といふ事に關して約一學期を要した事を見ても了解出来る。先生は熱の人で、熱して來られると、とても早いレクチュア―になつて來る。「アレアレは――（吾々は）と前にたれ下つて來る髪の毛をかき上げかき上げ、口角泡を飛ばして僕等に心から教授して下さつた事は厚く感謝してゐる

石津先生のキビしくした講議は實に愉快だった。

「シヨレがですね——」(それがですね)と先生が、メートルを上げて來ると必ず、一時間に四五度は先生獨特のかん高いお聲が出る。

「その内包と外延に於て……吾々の看過し得ない處である……。」と、矢鱈に論理的の講譯があるかと思ふと、脱線されて、いつかなど、震災の話で一時間つぶれた事もあつた位非常にどこかしら兄さんの様な親しみのする方だった。だから先生のお宅へもよく遊びに行つては、大法螺ばかり吹いたものだった。

試験をせぬ主義の奈倉先生の事は、あまりにも書く事が多くて、それに別に此本にも書いてゐるから何も言はぬが、あの教室でのお話——全く生きた教育を僕等にして下さつた。

栗林先生の時間は、どちらが先生か解らぬ位、御親切な御教授振りで、實際教授の方であれ位頭の低い方は一寸ないと言つても過言でない。

校長先生の法律的一系亂れぬレクチャアには、いつもながら兎もすると理窟の言ひたい僕等も一言なかつた。

實に先生の偉大なる御人格は、いかに僕等を無言の裡に御教導下された事か。今になつて、つくづく有難く思つてゐる。よく僕は、先生のお宅には、よせていたゞいた。そして四方山の御高見を拜聽して裨益する處が少くなかつた。

先生の事を一々書けば、いくらでもあるが、先生の棚卸になるから此邊で切り上げるが、要するに、僕等は先生に恵まれてゐた。そして、先生と生徒との間の情的關係が非常に濃かだつたので、學校

全體の空氣が、明るい氣分のものが漂つてゐた。

そんな風だつたから試験も決してよく言ふ試験地獄的の感じは僕等にはしなかつたし、平常は、興味多いレクチュアアの時間が多かつたので、僕等も喜んで勉強したものだつた。故に僕等の生活は、實に天下太平であつた。

天下太平だから僕等にゆとりといふものが出来て来る、従つて、考へる時間を多く與へられる。そこで自分の好きな研究もして、生きた學問が知らず識らず出来た事は幸福だつた。

其の中に、友達も出来て来る。そして皆中學時代とは打つて變つて、ヂェントルマンリイでしかも胸襟を開いての交友だから實に愉快だ。とくに、僕の居た乙組といふクラスは、一種特別な組で、何とか言ふとすぐ一致團結する組で、その中を流れてゐた空氣は、實

に和氣霽々たるものがあつた。だからクラス會なども一番頻繁にやつたし、色々な件や問題に際して、即座に意見の一致するのは我が乙組を措いて他に見られなかつた。

そんなら同じ分子ばかりが構成してゐたかと言ふとさうではない。ホツケト、バスケット、ベース、フイールト、トラック等々の運動家があるかと思へば、辯論部の御大もゐる。生氣熱の盛んな奴がゐる。活動ファン、カメラ黨、弓をおつばじめるもの、佛教徒あり、アーメン黨あり、といふ具合に何々會の幹事、何々クラブの女房役といったものが、他のどのクラスよりも多く居て随分外部的に活動してゐる異分子揃でありながら、そこを流れる乙組魂は、よくこれ等を打つて一丸となし、それが強固な團結力となつて迷り出でたものと思ふ。

斯く外部的に活動する所謂發展家が多かつたにも拘はらず、これ
で、勉強の方にかけても相當皆んな自信のあつた連中だから面白い、
そのお蔭で、三年になつて僕が世話する様になつてからも、クラス
の意向が、いつも鮮明で、動搖しなかつたので、非常にやりよかつ
た事を感謝してゐる。が僕がクラスの爲めは思つた積りでも、實行
が思ふ存分出来なかつた事を衷心より残念に思つてゐる。しかし、
何は兎もあれ、その親しさの結晶を最後のあの菜香での涙ながらの
別離の夕べ（昭和四年三月一日）に於て如實に表現した。
恐らく三乙の諸君ならあの夜の感極つたシーンは一生忘れやうた
つて忘れる事の出来ない思出として永遠に僕等の腦裡に刻み込まれ
るであらう。

そして西に東に離別した今日、しみく／＼友への親しさを感ずるの
は、蓋し僕一人ではあるまい。

我愛する三乙諸君よ！ 何卒無事に、あの時誓つた『日本の爲め』
に、『世界人類』のために、何かお互にやらう！

Friendship is stronger than kindred.

學校の中食は、それこそ雨の日も、雪の日も、あの消費組合の食
堂(?)へ友達五六人と五錢の『うどん』に五錢の『キツネズシ』に
舌鼓を打つたものだった。それが又やまぶきの『うどん』よりも、
八木の八木ランチよりも僕等にはうまく思へた。

あの婆さんが、『貝島さん、一寸そのお皿を取つて。』とまるで子供
か小使みたいに高商の學生様を願の先で使つてくれた所など、實に
忘れ難い思出の一つとなつた。

僕の事を皆んなが『ケツネズシ』の『消費組合の名譽會員』のと

言つたのも宜なるかなと思ふ。

愈々最後の年になると、學校の方は益々要領がよくなるし、最後だと思ふもんだから、あれも、これもと、やれ論文の、やれ卒業試験のと忙しい間にも、色々の方面へそれでなくとも發展したい方だつたから、祭り上げられたのを幸ひ、自分の事が、ろくに出来もせぬくせをして人の世話ばかりを矢鱈にしたものだつた。

やれ、生氣クラブの、やれ弓道部の、やれ辯論大會の、カメラ展のと、時には二つの會がダブル事などあつて閉口した事もあつた。それに、湯田の方へは會社の講習生が来てゐたので、一週に二度や三度は行くし、カクバミ會は出来るだけ世話はしたいし、クラスの問題は、僕が先生と生徒との媒介的役目を仰せつかるし、實に以て手が十本欲しかつた。

愈々卒業も目前になると、試験や、就職問題で苦しんでゐる所へ、毎日の様に何々會の送別會といふので夜がふけるといふ具合だもんだから、皆んなそわ／＼して落ちつかぬ。

そこへ、斷然『ノート割引』といふ事件が起つた。その理由が面白い。以上の如く精神的に悩んでゐるところへ、無情にも試験科目の負擔が重すぎるといふのである。そこで、僕と他の級長二三人が、その交渉員といふ有難い(?)役になつて、よせばよいのに妙な男氣を出してさ、校長先生を手始めに口説いて廻つたのは、聊か滑稽といふより悲痛なものだつた。『貝島と云ふ奴は、アイドルボーイだな』と先生達に思はれた事だらう。があの際はやむを得なかつたよ。そんな風にごたく／＼してゐる間に、いつしか卒業してしまつて散り散りになつてはゐるが、三乙黨の精神的交渉は、今も尙、否今後

とも益々その密接さを強大ならしめる事と思惟する。

長い様で短かつた山口學生生活三年間の印象は、實に、あの僕等が作つた『思ひ出草』を繙くとき、アルバム寫真を見る時、痛切にたのしかりし學生時代がたまらなくなつかしく思はれる。

(昭和四年八月十五日)

(附) 第一回山口かたばみ會の思出

忘れもしない大正十五年、未だ僕等の帽子の徽章がピカ／＼して居た五月七日、折角斯うして山口に居て、同じ學校で、全じ惠の下に幸福な學生々活をして居る諸君と顔を會はせる機會もないと云ふ事は實に面白くないといふので、學校で始めて皆さんにお目にかつたのでした。

そして翌廿一週年紀念の前日(五月八日) 我校の生みの親鳳陽先生のお墓詣りも済んで、午後六時から、その鳳陽先生のお墓の近くの例の外郎で有名な御堀の友永君の處で、第一回會合の喜びを分ち合ふ奇縁は結ばれたので有りました。會合と云つても勿論始めは『かたばみ會』なんて立派な名が附て居たわけでは有りません、唯ほんの同じグループの會合に過ぎませんでした。……

皆キチンと時間勵行幸先がい、最初が僕の紀念撮影に一同外行顔、それから友永君の開會の挨拶、石橋君が規約を提出、異議なく可決、菓子と言つても雑音の多い部類に屬する、所謂京都の名山東山(乾菓子山)程の方で其伴奏の中に自己紹介が始つた。僕は身體の弱かつた事から、お灸の効用に及ぶ、谷君が御國自慢、石橋君がシンミリさせる、室園君が元氣よくやつつける……仲々賑かで時間觀念な

んか皆の頭にはない。四疊半の部屋に時ならぬ歓聲を漲らして、氣持ちのよい、よく氣の合つた此會はいつ終ると思はれない。その中誰言ふとなく『あまりおそくなるから』とて名残を惜みつゝ坐を立つて五月間を各自その歸途についたのであつた。……それが第二回(六月廿日)——第三回(七月十日)と生れ出でた雛は追々成長して、その中に『かたばみ會』といふ名のもとに全国的にこんな美しい會が生れ出た事は僕等として最も嬉しく感ずる處で有ります。

僕の月旦

貝島慶太郎君、長府出身、身體はかなりスナリして御座るが生氣の元氣で、學校も休まないし、熱もなか／＼ある。彼の赤痢繁殖所の稱ある消費組合、食堂の一隅に五錢のウドンと稻荷ズシに舌鼓を

打つ處、毎朝の『お早う』ゴム靴をはいた雨の日の君、知らぬふりしてプロの家庭を訪ね、どうやら論文もそうした方面の御研究らしい、とにかく、ブルジョア階級の君には稀らしいサムシングを持ち、ピリツとした處に言ひ知れぬ穩和さと親しみのあるのが、君の性格で君は所謂ブルとプロの對立の人でなく、一ケの人間としての君である。だから君の下では激越な共産運動も起るまい、又君は活動的に出來てゐる。生氣クラブに、辯論部に、カメラ同好會等々に無くてはならぬ人で何事でも人より一步先んじてやらねば止まぬ處と機敏と要領をつかむ事にかけてはや一人に負けない。そして又意志の人であるが案外碎けてゐて、女の話と、話を下げる事にかけての猛者連の局外に立つて天晴れ紳士の誇を保持してゐる君にも、時々やさしい事をおつしやる事がないでもない。木石でないんだからな

―そして君は妙にノートをひき破るくせがある、それに生氣クラブの原稿等（特にキンネス先生の時間に）御書きになると云ひたいが案外ラブレターらしい。今でこそクラスを牛耳つてゐるが將來の實業界に於ける君の活動が偲ばれる。

（山口高等商業學校學友會報「人物月旦」中より）

學生時代の思ひ出さまざま

時の流れの中に遠ざかり薄れゆく記憶をたどり／＼て。

小學時代の部

（い）田園生活

百舌の聲が柿の梢に高らかに聞ゆる頃になると毎年僕の小學校で

催される野菜の品評會の爲めの畠の準備に忙しい。學校から歸ると直ぐ畠へと急ぐ。そして來る品評會を夢みつゝ畠の地ならしや種蒔きに餘念がない。或は宮重大根に、練馬に、山東白菜にと手入れがなかく大變である。けれど其れが其の頃の僕としては無上の楽しみだつたのだ。僕の小學校と云ふのが、いと田舎だつたので大部分の生徒が百姓の子弟ばかりである。従つてこうした一寸他校に見られぬ催もあつたのだらうが、何しろ百姓が本職の子供と競争するんだからそれこそ一生懸命だつた。其の爲めか一等になつた事も二度あつたし、二三等はよく戴いた。その賞品は大事に鬼の首でも取つた様に思つてしまつて置いて、大概實の持ち腐りといふ形になしてしまつた。それから梅雨頃には一週間位の休みがある。それは百姓の最も多忙の時だからだ。そして其前後によく田の害虫取りに學

校全體が行くのだった。そして其虫を多く取つた者はそれ〴〵賞品が頂戴出来た。何でも半紙五十枚か百枚位のものだつたがこれ又躍り上つて喜んだものだつた。

雨の中をあのどぶ田(苗代)の中に入り込んで鶉の目鷹の目で害虫を搜索するところなど田舎の學校ならでは見られない光景である。

(ろ)運動會と遠足

野も山も色とり〴〵の装を凝す頃ほひになると、あちらでも、こちらでも運動會や遠足が始まるのは毎年のこと。それも中學頃になると『又かい』と言つた調子になるが、平常の單調さに厭き〴〵してゐる上に好奇心の結晶時代の小學生には其れこそ夜も寝られぬ楽しみである。運動會の日は田舎だから家族總出の花見氣分で、それは

〴〵賑かな事である。何時かの運動會の時などは、運動會を見に來たのやらお酒を飲みに來たのやら解らぬ所謂花より團子式の連中が何だか喧嘩騒ぎを起した事さへあつた。又こんな事もあつた。四年か五年の時の運動會だつた、僕が障害物競争に出て、尻のつまつた袋に當つて頭だけ入れて出られずに泣き出した事も記憶してゐる。が中隊教練は我校の御得意で何時かなど縣廢からおほめの言葉を頂戴したとか。

遠足も運動會同様楽しいものだつた。就中、八枚岩に行つた記憶が一番深いものがある様だ。あちらの方面に行つたら、も一度八枚岩には是非行つて見たいと常に思つてゐる位である。

(は)腕白大將

僕は小學生の時は非常に弱かつたので、俾かさもなくば自働車で

學校の近くまで往復して居た。處が田舎の事だから友達の中にそれがひどく癢に障つたらしい連中も居て、常に僕に對して意地わるくあたるのだつた。その頃高等二年だつた代表的腕白小僧のAといふのがとり分け僕に寄ると觸ると嫌味を言つては、あわよくば喧嘩を賣らんとする形勢なので、僕は實際子供心にも辛い思ひをいくらした事か解らぬ。

或時、いつもの様に僕が校門を入ると突然そいつらが五六人がかんばつて通してくれない。困り抜いてゐるところへ、僕の内の書生を當時してゐた腕力家を以て自任してゐたKといふのがつか／＼とやつて来て物をも言はず其例の腕白大將をはり飛した。そしてそれ以來こんな悪戯をしなくなつた。この時位氣のせい／＼した事はなかつた。これも今から考へると有りさうな事件で、今では思ひ出の一つとなつてゐる。

(に) 小 技 術 家

僕は小學時代は手工が好きだつた。好きこそ物の上手なれとかで、なか／＼これで細工物にかけては御得意且つ御自慢の方だつた。特に飛行機と軍艦の製作には學校の先生も舌を巻いて感心する位の精巧なものもたんと作つて居た。何しろ飛行機の實物模型などと來たら何百臺作つたか解らぬ位亂造したのだから其中には好い出來のものも一つや二つあつても好い譯である。そして其れを片つ端から破壊するのが又一つの楽しみだつたからやり切れない。今から思ふと一つでも當時の作品が現存してゐたらなどと思はぬでもない。軍艦は長門の模型など會心の作だつたと記憶してゐる。その他自動車、

建築物、勳章、鎧に至るまで作つたものだ。その鎧は今に保存してゐる。そしてこれらの模型は幼稚なものではあつたらうが其當時の自分としては全く飛行機などを作り上げた時は、天晴れ小技術家氣どりで、『慶ちゃんは何になる？』と問はれ、ば必ず『飛行機作りになる』と答へたものだつたが、今ははや幼き日の夢となつてしまつた。

(ほ) 怖かつたこと

(a) キモトリ

今から十四五年も前の事で、しかも田舎と來てるから今頃の子供には思ひもつかぬ恐怖が僕等にはあつた。それは所謂俗に云ふ『キモトリ』といふ奴である。『キモトリ』とは子供の生き肝きぎを好んで取

るといふ凄い人間である。事實そんな者を見た譯ではないが、その頃の人の話題によく上つてゐたので自然子供だつた僕等も知つてゐたのであつた。それが夕方、山道では必ず出ると言ふので決して一人では夕方外へは出得なんだ位だつた。併し、一人も『キモトリ』にやられたといふ事を聞かなかつたから或は嘘だつたかも知れないが、兎も角當時の怖かつたものの一つだつた。

(b) 洪水

まだ三年位の時、あの香井田川が豪雨の爲めに氾濫して學校の石段の下まで一面の濁水で、歸る事が出来ないで皆んな青くなつて震ひながら水の引くまで五六時間も待つてゐた時も實に僕等にとつては大きな恐怖だつた。

(c) ドーラクモン

『ドーラクモン』とはあの地方で所謂『ころつち』(Vagrant or ruffian)の事を呼ぶ言葉である。これが時々学校の校庭などに入つて來ては酒を飲みちらすのには僕等だけではない、先生までが閉口して居られた。けれど先づ手だしは無用、腫れ物に觸る心得が肝要とて遠くから只ながめてゐたものだった。

『そーらドーラクモンが來た!』と言ふと一散に教員室の方へ走り込んだ位怖かつた。

これも今は昔話してみたいな話して今時の香井田の小學生に話しても理解に苦しむかも知れない。

(d) ド ス

『ドス』とは僕の郷里の方で『短刀』の事を言ふのである。僕の郷

里は炭坑地帯で一般人の氣質がながく荒いところで、その頃はまだ此所謂『ドス』なるものを懐中して居る者も少くなかつた。

それを小學生までが見習つて高等科の者二三十名が學校の机の中に『ドス』を入れてゐたのを先生に發見されて處分されたといふ話を聞いて尋常科の生徒は震ひ上つて恐怖したものだつた。今から思ふとあの頃はまだく野蠻だつたなとさへ思ふ。

中學時代の部

(い) 應援歌の練習

まだ僕等の帽子の徽章がピカ／＼してゐた時分、『放課後直ちに造船所附近へ集合!』と破鑄聲の五年の猛者連がどなつて來る。と未だはやく／＼の一年生たちはそう來たどばかりちり／＼したものだつ

た。それは野球應援歌の練習の爲めの召集令である。……それが一日や二日なら辛抱もするが十日も二十日も對校野球戦のある前には必ずやられるのだからたまらない。毎日／＼放課後から五時六時までも同じ歌を何回となくカーバイ歌うのだから喉がいたくなる。そればかりではない、うっかりすると例の上級のこわい、兄ちゃんが『もつと大きな聲を出さんか アーン』と棍棒片手にやつて来るので、正直な僕等は聲の囁れるまで歌つたものだつた。歌だけではない拍手の稽古や、遂には『此頃の一年生はごうも敬禮の仕方がなつちよらん！』とて、舉手注目禮を一人一人上級生の前に呼び出されてやらされたりしたものだ。眞赤になつて震ひながら眞剣にやつてゐる一年生こそ氣の毒なものだ。

けれども其當時教はつた應援歌は一生懸命で覺けたせい、かちやんと今に記憶に残つてゐるのは有難い氣もする。

(ろ) マラソン

春秋二回は必ず長距離マラソンをやらされた。一二年は前田を廻つて来るのだが上級になると三里はたつぷりある一の宮方面へ出かけた。そうだ一番苦いのが三分の一位のところでは機械的に唯すたく／＼と足が獨りで前へ出る様だ。これで何時も全員の三分の二以上のところまで走つてゐたが一度二十幾番かになつて僕の最高記録を作つて、『貝島君は割合強いな』と先生から言はれた事もあつた。まあ僕なんぞ氣で走るんだな。

(は) 優勝戦

中學三四年の頃盛んにテニスをやつたものだつた。そして小々腕

に自信がついてゐた頃、下關の會社のテニス大會へ出場して見た。増本君なんどの居た頃で到底勝ち目はなかつたのだから、どうした譯か、運よく強い組とは戦はない内に何時か優勝戦になつて居た。相手が負けてくれたのかも知れないが兎に角優勝してテニスのユニホームを一着戴いた。

まづ僕のテニスはあれが初め終りだつたと思つてゐる。

(二) お目玉頂戴のこと

二年生の時、北野先生(一名ドカ)の體驗の時間猛烈にお目玉頂戴の光榮に浴した事がある。その理由は、先生例の所謂代表的體操教師のスタイルを以て我々に御得意の型をお教示中だつた。何しろあの大きなお體がツシーンメリメリとばかり動く度に乗つてゐる机

の臺がグラ／＼と今にも破壊せんばかりの凄じさ、それに先生のあの御面相と來てゐるので失禮だが思はず『ブーッ』とふき出してしまつた。とさあ大へん！それが先生の逆鱗にひごく觸れたと見わて、大喝一聲『こら！何笑つちよる！』と火が出る様だ。形勢只ならずと見て取つた僕は正直に『ハッ、可笑かつたから笑ひました』と言つてやつた。ところが第二發目の巨彈は發せられた！『何が可笑しかつた！』と風雲益々急だ。そこで『先生の様子が可笑しかつたのです！』と一生懸命。『馬鹿！教師を笑ふ奴があるか！』とそれきり形がついた様だつた。卒直に言つたので先生もあまりそれ以上怒る事も出来なかつたらしい。

(は) 山口へ

三年生の春、山口の全縣下野球大會の應援に長門峽見學をかねて

一泊旅行をした事があつた。長門峽の見學に疲れたところを又もや應援で實際面白いどころか苦痛だつた。そしてその日の中食は今思へば龜山公園でしたらしい。目下に見ゆる建物を誰やらが『あれが高商だ』と言つてゐるのを只無關心に聞き流したものだつた。それが二三年のちには自分の行く學校となつたとは何かの因縁だとしみじみ感ぜさせられる。

(へ) 展 覽 會

中學での最後の展覧會である。一ヶ月も前から傑作を作るべく熱中したものだつた。

水彩畫に、コンテ畫に、用器畫に、寫真にと一生一代の活躍ぶり何でも一週間以上もかゝつてプランクトンの顯微鏡下の寫生をしたのもあの時だつた。そしてその努力の甲斐あつて中學としては最高のメダルを二個も頂戴するし、右のプランクトンの實寫は博物の先生からは是非とあつてお譲りした。そして其の時畫いた飛行機的设计圖は何時か手本に取り返したいとさへ思ふ程當時の會心の作だつた。やはり人間は『これが最後だ』と意識するとどるらい事をするものだと思つた。

(と) オンリー一錢

只の一錢で馬鹿を見た話がある。それは或時長府の先の吉田川附近で何とか云ふ飛行士が郷土訪問飛行をした時だつた。飛行機熱の高かつた時分だから何は措いても先づ見物にと自轉車を飛ばしたまでは好々か、さて吉田川に来て遙か向ふに飛行機の姿は見わてゐな

がら残念な事が出来てしまった。と云ふのは、そこに渡し舟があつてそれを渡してくれさへすれば難なく行けるのである。がしかしこれを渡らねば一里位遠廻りになると言ふのだ。

ところが餘り夢中で家を飛びだしたので一錢の金の用意もない。それに渡し賃が皮肉にも只の一錢だと来てゐるからやり切れない。泣く様にして舟頭さんに歎願して見たが更に御許がない。そこでしばらく一里餘り又自轉車で………やつと飛行場の近くに來ると泣きづらに蜂とか『十錢の入場料』には流石にグンニヤリせざるを得なかつた。まあどうにかして見るには見たがどうも思はしく飛行機の快感を味ふ事が出来なかつた。

(ち) 文明の利器故の失敗

中學四年の頃、自轉車にやつと乗り馴れた頃嬉しさのあまり一寸そこまでも文明の利器、自轉車の利用。

或日陸軍の秋期演習見學とあつて中學全員一の宮方面へ行つた事があつた。何しろ前に言つた通り失鱈に自轉車に乗りたいた分だつたので、こんな時にこそ文明の利器を應用せねばとか何とか理窟をつけて、皆より一足先に自轉車でチリン／＼と大分得意だつた。ところがあまり速力を出しすぎて、どんでもない山の中に迷ひ込んでしまつて皆の居る方に行かうと思ふがどうもうまく行かない。ぐるぐる同じ所を廻つてゐる中にバン／＼／＼といふ突然の銃聲に驚く、と、これはしたり………演習の真只中に何時かしら出てしまつてゐるではないか。後にも引かれず前へも行かれず文字通りの進退谷まつたのだつた。そして此時位、文明の利器がしみ／＼うらめしく思

はれた時はなかつた。

高商時代の部

(い) 御親閲の日

高商に入學した年の五月二十九日
皇太子殿下(今上陛下)の御親閲の日である。

無情な雨は昨夜來降りしきつて今朝も尙小やみにさへならない。

高等程度の學校の殿下の御前の分列式は我が校を以て嚆矢とする
と云ふので我等の光榮は此上ないものがあると同時に「よく出來れ
ば好いが」といふ心配で一ぱいだつた。

愈々晴れの分列式の幕は切つて落された。

海軍の軍樂隊の行進曲も勇しく我等は今將に分列への第一歩を踏み

出さんとして居るのである。あゝ其瞬間の我等の感激たるや實に名
状すべからざるもので、何の事はない電氣にかゝつたものゝ様に、
あのぬかるみの中を下半身をどろだらけにして無我夢中に突進した
ものだつた。そして『頭・右』の號令で一齊に殿下を仰ぎ奉つた時の
感じは今尙念頭から去り得ないものがある。實にあの時位頭の天邊
から足の先までズーンとした衝動を覺れた事はなかつた。そして僕
だけかと思つたら友達が皆一樣にあの氣分に満されたさうだ。
やはり日本人だなーといふ意識を今更ながら痛感した。

(ろ) 延びゆく若芽

何事によらず新たなものゝ創設と云ふ事はこれでなか／＼容易なもの
でない。而かも前例の更にないものと來ては實際やり切れない。僕

が高商への置き土産として創立した生氣クラブの如きは明に其の例に洩れない。何しろ生氣てふ問題が一般に理解されてゐないし、それに其れを植いつけ様とする對象が學校、しかも官立と來てるから並大抵でない。

けれども自己の善と認めたる事は例へそれが『善の押賣り』であつてもよい、そいつを眞向に振り翳して突進して然るべきだと思ふ。さう第三者の非難排斥におめくくと引き下る必要は斷じてない……なごど勝手に理窟をつけて生氣の爲めに活動したものだつた。しかし、七轉び八起きとまでは行かないけれども相當苦い経験もしたが先づ順調に成長して來た事は何よりも嬉しく思つてゐる。それは第一が室園君始め同好のクラスメート諸君の献身的努力と眞の人類愛の結晶の然らしめたものである事は勿論ながら、今日の成功を見たのは

先づ『一にも人、二にも人、三にも人』と、人物の選擇養成を主眼とし『人の和』を強調した結果も與つて大に力ありと思惟する。古語に言ふ『地の利は人の和にしかず』と語簡なりと云へどもそこには或る眞理の存在する事を僕は信ずる。そして僕等の後繼者たる安井幹事を始め熱心なる委員諸君は、よく僕等の意のある處を解して着々として生氣道の爲め、否々人類愛てふ大理想のもとに益々斯道のため精進せられて居る事實を見ては、涙ぐましい感激をさへ催する。そして或時『學校の生徒課でも生氣クラブ員なら先づ安心出来る人物だとして折り紙をつけてるせ』といふ事を聞いて實際僕はその時泣いた。これと同一筆法に生れた我が弓道部も愈々道場の新設を見て茲に人の和に地の利を得、加之岡本幹事を始め多數の委員諸君の熱烈なる指導のもとに健かに延び行く姿を見て實に『永遠にその元氣

で延び行けよかし」と呼びたくなると同時にさうした諸君へ何と言つてお禮をしてよいか解らぬ位感謝の念が油然として湧くを覺へる。

(は 赤い顔して

(a) 寫 眞 展

高商にカメラ同好會といふ奴を世話好きが故に又一つ作つた。時々まあ年に春秋二回は必ず展覽會を開催した。けれど何しろ大家(自稱)揃の事だし、山口といふ田舎のあんちゃんやのんた娘に寫眞の趣味もくそもあつたものかわ……、で(いやどうも失禮く、山口も市になりましたつけね)一向見物が來ない。時たまちらほら御座るが我等が苦心の傑作(?)を素通りとはあつけない。あつけないは通り越して少々かなしくなる。そこで同好の友と頭をひねつた結果、展覽

會場を斷然『野田高等女學校』と改める事にした。そして町のポスターにも『於女學校』といふ字を馬鹿に大きく書いて出すし、高商内の掲示板へも『女學校』を特筆大書して、その反響如何にと僕等は固唾呑んで見てゐた。ところが果して僕等の豫想は的中した。學校中の一大センセーションを巻き起したいふもの。そればかりではない、平常の展覽會ならまあ働いてくれる人は四五人あるなしだのに場所が場所だけに會場の飾りつけに、後始末に會員總出否會員外の人の顔も二三見わた位甲斐くしく立ち働いてくれる。何しろいくらする、いや奴でも女學生環視の中だから高商の様なわけには行かぬ。いや働くの何んにつて、目の廻る活動振りに流石の會場も見ると出來上り、翌日の後始末も造作なく出來た。

そしてその日の見物が押すなく、だつた事は論を俟たぬ。そして

後で友達から『うまくお若いものの心理を活用したね』と譽められたよ。いやはやお若い者は困つた(?)ものだね。

(b) バザー

秋になると何處の女學校でもバザーといふ奴をやる。まづ何の事はない職業婦人の下稽古と云つた形、など言はうものなら柳眉を逆立てて『何てすつて!』と來るから文字通り眞に結構な御催しでへへ、と言つておく。

何は兎もあれ、それが一般に特に男學生にポピュラーな事は事實である。そこで愈々バザーとなると學校の終りを告げるベルも遅しと皆一様にバザーへと足が無意識的に向いて歩いてゐる。最初にバザーへ行つた時はいくら無神経な奴でも顔のほてりを如何ともなす事が出來ない。胸は高鳴るし、息ははづむし全く以てこれで男一匹

かと思はれる程みじめなものである。何くそ己も男だ! とばかり無我夢中で走り込んだものの只々おろ／＼と友達の後小さくなつてそれこそ文字通りの素通りである。けれど其れが二度三度となるとそろ／＼横着になつて來て、ドーナツの一つもやゝ冷靜に食へる様になる。さあさうなつて來ると事だ。その次頃からは、『おい、君もう一ぱいコーヒー』『僕にももう一ぱい』などとまるで未來の令夫人たるものをカフェーの女給同様の取扱ひ方をする不良の徒になるのだから面白い。そしてコーヒー一ぱいに一時間もガムバルのだからたまらない、けれどそこは學生同士だ、無邪氣なものだ。そして只それだけのことである。

(c) シンギング、クラス?

今は我が校第一の人氣者、キンネス教授の時間である。先生は一

心に前の列の人に何やら英語の手紙の書き方とやらを御説明になつてゐる。そしてそれに合點をしてゐるものがオンリー二三人とはちと淋しい。然らば外の人は遊んでゐるのかと言へばさうではない。皆んなコッ／＼と御勉強なさつてゐる。けれども只その勉強の方面が違つてゐると言ふだけである。或は、今日英語があたると見えてしきりに字書をくつてゐる人がある。或人はノートのブランクをうめるのに忙しい。その隣の人はこれは又どうした事か、くるりつと後を向いて寫眞畫報の俳優の品定めに御熱心だ。ずつと後では四五人何やら面白可笑しく其重大事件の會議(?)中である。ラブレターらしいのを書きつゝにやりとする奴もあるし、これ見よがしに赤い原書をひろげてゐるものもある。そして僕などやはりその例に洩れずキンネス氏の時間は『論文時間なり』と勝手に時間割を變更して一心に

論文の原稿をあちらの本から、こちらの本から、と引き出して來ては單にそのコンピネートに汲々たるものだつた。そしてキンネス先生が廻つて來ると急いで教科書を開いて“*What is this?*”とか何と言つて出鱈目の質問をしてはけろりとしたものだつた。自分ながらよくこゝまで横著者になつたものど一方では悲觀し、他面では感心して見たりした。それは三年も終りに近い頃のこと。一年の終り頃から二年の終りにかけては、キンネス先生の時間は『シンギング、アワ』で眞の授業は正味三十分、後二十分は色々あちらの唱歌を教へてもらつた。それもほんのあちらの幼稚園の唱歌と來てゐるから有難いのやら馬鹿にされてゐるのやら解らない。が兎も角喜んで歌つたものだつた。時にはバイオリンやセロの眞似を先生が上手に見せてやんやと言はせる事もあつた。ところが外の教授連中から『ど

もうキンネスの時間は騒がしくてでんで隣のクラスの授業が出来ん
 ！』といふ手厳しいお小言で、とう／＼それ以来一寸も歌が聞かれ
 なくなつた。キンネス先生も御得意のお歌が歌へなくなつて内心不
 平らしかつたが、表面は何くはぬ顔して『風邪で歌へない／＼』と言
 つては遂に一度もあの美しいお聲が聞かれなかつたのは今に何とな
 く淋しい。そしてそれ以来のキンネス先生の時間は以上見た様な何
 とも解らぬ混合自習時間になつてしまつた。あれでは返つて以前の
 少々お隣には御迷惑なからお互の事だから辛抱して纏つた『シンギ
 ング、クラス』時代の方がまじだつたかも知れないとさへ思ふが、
 何にしろ今では忘れられぬ思ひ出の一つとなつてしまつた。

(ほ) 鸚鵡のまね

二年の始めに『吾人は須からく辯論に堪能ならざるべからず』と思
 つたかどうか知らぬか兎に角辯論部に入部した。會員となつただけ
 はで腹の虫が承知しないので或日の校内辯論大會に生れて始めて出
 演することにした。

演題は『我國民性の史的考察』といふ目覺しいものだ。實のところ先
 づ『題』からこい、と言つた調子のものでつたが、さて僕の番になつて
 愈々演壇に立つて一渡り氣を落ちつける爲めに聴象をぐるりとこの
 大きな目で見廻したところは上出来だつたが只黒いものがぼんやり
 と目に映つただけで後は何が何やら解らなくなつた。『ハハア大分上
 氣してるな』と自分で意識しながらもやつこの思ひで第一發のお定
 り文句の『諸君！』を自分ながら驚く程の大聲で呼んだ。と次第に心
 も静つてまあ初陣としてはかなりの出来だつたと記憶してゐる。

いつだつたか確か二年の終りだつた。全縣下青年辯論大會が師範の講堂であつた時などは自分ながら『大分上手になつたわい』と思ふ位、くそ落ちつきに落さつて何かしらしやべりまくつた事もあつた。そしてその時のメダルは好い記念となつた。

將來リーダーたる立場にあるものは學生時代に野次をあびながら演壇に立つて見て置くのも確かに必要な事だと思ふ。そして其れが將來必ずや何かの役に立つ事は斷言して憚らない。

(へ) ストープ會議

山口は大陸的氣候で、冬はなかく寒いことである。だから冬になると朝、雪を分けての登校は可なり辛い。けれども案外僕等は嫌な顔もしないので學校へと急ぐ。どうもへんだと思つたら其れには大

なる理由がある。下手な下宿に居て震へてゐるより學校のカタツムリと命名するストープの側へ行つた方が第一經濟的から言つてもいくらましだかわからない。カタツムリとは蓋しそのストープの形恰かもカタツムリのそれを思はしむるにより命名したものである。

ストープの吸引力又偉大なるかなである。ところが單に煖をさるだけでは仲々そんな吸引力のある筈がない。そこには何かより以上の力強い理由がなければならぬ。その理由は何ぞやと言ふに、それは『ストープ會議』あるが故に外ならない。

ストープ會議！これ程我等にとつて愉快な楽しいものは他にない。親しき友ごちと降り積る雪花を見ながら四方山の話に花を吹かせて打ち興する様は全く無上の國樂であらねばならない。

或はスポーツ話しに、教授の棚卸しに、のんた娘の色よい話しに

それからそれへと盡きせぬ話題は展開せられて時間の経つのも解らない位であつた。

冬のストロブ位引力の強いものは先づない。そしてこれ位お互の心と心を溶け合して融和させるものも他にない。そして其れは臆て固い／＼友情となつて進み出づるものである。

(と) 山口ぶら

銀ぶらとか金ぶらとかは言ひもし聞きもするが『山口ぶら』なんて知らないぞと言ふだらう。しかし山口の學生は螢飛び交ふ夕べ、これと言つて別に用がある譯でもないが『食後の散策』と言つた様な名目のもとにぶらり／＼と夕闇せまる立小路などを徐ろ歩むのが何かしら無上に嬉しいものである。ちよい／＼と店をのぞい

ては冷かして見る。又氣が向いたら金龍館でも行かうし、お腹と財布具合ではふじ屋の喫茶部へでも入らうし、のんだ娘に振り返りもしようし、眞に自由で勝手である。そして軽い疲れを感じながら星を仰いで下宿の二階へと歸り行く彼はもうそれで充分満足してゐるのである。(十月初旬東京にて)

清水港での印象

昨夜の雨は後なく晴れて、すが／＼しい秋空に山中の朝日に映わた富士が今日は一層美しく思はれる。

小さい頃からよく舛谷君や久保田君から其話しを聞かされて一度は行つて見たいと思つてゐた念願がやつとかなつて舛谷君の案内で憧れの清水港へと旅立つ事になつて、善は急げで中食をすますと直

ぐ山中を出發。御殿場からは汽車で江尻へ。江尻の宿は京稻といふ新しい旅館で、小憩の後直ちに鈴木氏（鈴與商店第六代の御主人）の御案内にて清水港をランチにて一周する。途中何んだか僕等と曰く因縁のありそうな貝島崎に上陸した。そこは舩谷さんの話によると昔はなか／＼美しい所謂白砂青松の海濱だったそうだが、今は文化の手はこの仙境にまで延んで、造船所やガスタンクまで出來てゐてタンク越しに見る富士はあまり感心されないものがあつた。何でも土地の人の調べてくれた記録に依ると、貝島の名稱は古より貝類を多く産せしに依るとかで、徳川家康の爲めに頼宣が造營した貝島御殿のあつた處で後駿河大納言の闕所により廢せられたものとか、今は僅かにその遺跡を最勝閣の東方に残すのみである。

とまれ、僕等の祖先發祥の地かも知れないと思つて、そこいらの貝殻を二三拾つてポケットに納めて見た。そして山中で見たより恰好のいゝ富士を稱へつゝ夕闇せまる頃歸宿。

夜は海軍の飛行機らしいのが盛んに燈火をつけてブン／＼やつてゐる。明日の第一艦隊の入港と何かの關係があるらしい。山中の静けさに馴れた僕等には、夜の町の雑音は少々堪へ難いものがあつたが晝の疲れに間もなく夢路をたどる……ふと目が覺めると宿の女中達の『……軍艦が……』など言ふ聲がとぎれ／＼聞える。その軍艦といふ聲に殆んど反射的に床から飛び起きて眠い目をこすり／＼港の方を朝霧の中に見渡すと、そこには、確か七時か八時頃入港と聞いてゐた第一艦隊がもうちやんとおさまつてゐるではないか。霧に霞んで定かではないが、陸奥の例のドエライマストと曲げられた異様な煙突が目立つ。その向ふに山城と伊勢らしい大きいのがその英姿

を浮べてゐる。その他輕巡洋艦や驅逐艦は二十隻以上堂々海を歴してゐるのが見ゆる。一人で『やつぱり日本海軍は世界一だな』など思つて偉がる。その壯觀に見入つてゐると『御飯ですよ！』とどなられてやつと我に歸る。朝餉の味噌汁に舌鼓を打つてから自動車にて龍華寺へ、こゝには五六百年も経つらんと思ふ大蘇鐵が昔の夢を秘めて生ひ繁つてゐる。

龍華寺の蘇鐵仰ぐや秋の空

それに大きなシャポテンがある。シャポテンと云へば中學の時讀んだ夏目さんの觀海寺のそのの形容を思ひ出す。あの杓子を柄の方を下に上へ上へと繼ぎたした様などころ、そしてその大杓子から子杓子が生れるとはどうしても思はれない。何でも一夜の中に何處からか子杓子が飛んで來てビタリと大杓子の頭へくつつくとしか思はれな

いと言つた先生の觀察の穿つてゐることを今更ながら感歎する。そしてその形があまり奇妙だから一寸手で觸つて見たくなる。けれども

さばてんはどにかくさわるものでなし

とて出しかけた手を引く。

それから有名な新三景三保の松原へと。

先づ第一に傳説の羽衣の松を仰ぐ。そしてどの枝に一體羽衣を懸けたのかな——などと思ふ。

羽衣のかゝりし枝や今いづこ

茶屋で澁茶をすゝりながら太平洋の優長にのたうつ金波銀波を見てゐるとやはり大きな海だな——といふ様な感じがする。そして不圖、あの大波のくだける渚へ行つて見たくなる。そこでしばらく秋の日を身體一ぱいに浴びてそゝろ歩す。歩きながら山もいいが海もいいな——と思ひつゝも、實際この景色ちや—天女も天下つた筈だ

と一人で感心して見る。それから自動車をとばして三保の最先端吹合岬へ。

白い燈臺がくつきりと青い秋空に浮き出してゐるところ、白砂青松長汀曲浦全く一幅の畫だ。そしてそこが思ひがけなくも今は飛行場になつてゐるらしく格納庫が一棟中にニューポールが一臺淋しそうにゐるだけ、全くガランとしたものだ。そして今燈臺の向ふに何式か知らぬが飛行準備中らしいのが一臺見ゆる。「飛ぶんだな」と思つたからカメラを用意する。と間もなくプロペラの音に秋の澄み切つた空気を振はせて滑足——離陸——次の瞬間にはもう興津方面へ機首を向けて眞一文字に飛び行く後姿を遙かに仰ぎ見るのであつた。

天かける人を仰ぎて思ふかな

天津乙女の舞やいかにと

次第に小さくなり行く機影をながめつゝ、『やはり飛行機が好きなんだな——』といふ意識を今更強く味ふ。これさへ見てゐれば何かしら心の澄む思ひがする僕だからな。三保に名残をおしみつゝ興津の井上候の御銅像を拜して山中湖への歸途についたのは午後二時過ぎだつた。

(昭和四年九月二十四日)

亡き友を悼みて

水引君！

君は何故一言のさよならもしないで、あわたゞしく逝つてしまつたのだ！

僕は一度お別れの言葉が交したかつたのだ。

さうだつた、あの卒業の日なつかしの山口を後にお互に『さよな

ら』を唯簡單にとり交したきり、半年の今日、それが永遠の『さよなら』にならうとは誰が思つただらう。あゝ其れはあまりにもあつけない。あまりにも情けない運命の悪戯なのだらう！

僕は君が入社して間もなく病氣になつたと聞いた時、實に以外に思つたよ。あのホツケーの御大として頑健を誇つた君故に。

しかし其後やゝ小康を得たと聞いて、僕は安堵の胸を撫で下したのだつた。

そして病床からの君の手紙を天華で讀んですつかり安心してしまつて居た。

君は轉地して、こゝしばらくみつしりと養生して一日も早く元の健康を得て思ひ切り活動して見たいと、元氣はあるが、何處ぞな

く淋しさうな書きぶりをしてゐたつけ、それが今日、只今遠き旅路なる湖畔にて、思はぬ悲報に接しようとは。

水引君！

君の訃報を得た瞬間の僕の驚きと悲しみと失望とを想像してくれ、天地が一時に闇黒になつた様で、事の意外に涙さへ出なんだ。

水引君！

君と僕との親交はそんなに永くはなかつた。しかし僕は君を相當知つて居た積りだつたし、君は僕をほんとに知つてくれた友の一人だつたね！

そら、あのクラス雑誌を書いた時にも僕の月旦の中で最もよく僕といふものを穿つてくれたのも君だつた。

水引君！